
「封印鏡」

水城麻衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「封印鏡」

【Nコード】

N4309C

【作者名】

水城麻衣

【あらすじ】

ふとしたことから異世界に迷い込んだサツキ。精霊の王、セラテムを封印するための条件とは？サツキは自分の世界に帰れるのか？封印鏡をめぐるサツキと仲間たちの冒険物語。2011.8.9、改稿のため一時削除しました。改稿後順次投稿の予定です。

序章

その道と呼ぶにも躊躇われるような細い獣道は、山の中をうねって走っていた。

左右は見透かすこともできないくらい深い森がずっと続く。道の上に投げかけられた木漏れ陽は絶えず細かく動き、聞こえる音といえば木の葉が風に擦れる音、それからどこか遠くで落ち葉が踏みしめられているような音——そのくらい。

その道をひたすら歩いて、自分の今居る場所も方角もすっかりわからなくなってしまうころ、ひょっこりその小さな小屋は現れる。

ひと目見て人が住んでいるとは到底思えないそのぼろ家には、しかしどうやら人が住んでいるらしい、という根強い噂があった。：小屋の周りをうろつく男の姿を見たとか、小屋の窓に灯りが見えたとか、いくつか目撃証言もあったが、何しろ滅多に人も通らない山の奥深くである。その山の周囲に住む人々は、山奥の小屋に住んでいる変な男、くらいの記憶しか持たず、その存在はほとんど忘れられていた。

ある天気の良い日の朝。その獣道を踏みしめる人影があった。

若い女である。足下が悪いはずの獣道をさっさと早足で歩くその身のこなしと、鼻筋の通った、はつきりとした顔立ちが目を引きつけた。長い黒髪は無造作にひとつにまとめて結んである。

その娘はかなりのスピードで獣道を歩いていたが、やがて件の小屋までたどり着くと、全く躊躇うことなくその小屋の前に立ち、扉をドンドン！と思い切り叩いた。

「ケン！！起きてる??？」

静かな朝に、よく通る声が響いた。

続いてボタンという音がして、どうやら返事を待たずに勝手に扉を開けたらしい。娘はそのままずんと小屋の奥に入っていく。すると、奥のほうからドスン、と何かが床にぶつかったような音がした。

「サツキ……」

掠れたその声の主は、どうやら今の瞬間まで夢の中にいたようだった。突然の侵入者に立ち上がりうとして見事に失敗したようで、派手に寝返りをうってうつ伏せた男の顔を、サツキ、と呼ばれたその娘は澄ました顔で覗き込んだ。

「なんだ、まだ寝てたの」

うーん、とまた寝返りをうってから、ケンと呼ばれたその男はのっそりと布団から起き直った。

年のころはサツキよりひと回りほど上であろうが、その精悍な体つきは全く歳を感じさせない。顔に蓄えた無精髭だけが山小屋での隠遁生活を偲ばせた。

「——おまえなあ、こんな早い時間に来るの、やめてくれよ」

急に起きたため頭痛がするのだろう、こめかみを押さえながらケンがぼそつと呟くのに、サツキは布団のそばにあぐらをかいて座ると、

「もう7時だもん、全然早くないでしょ」

楽しそうに寝起きの悪い男を眺めるその笑顔は屈託なかった。

ケン、と名前を呼んで朝から家にあがりこんではいるが、サツキとこの男には何の関わりもなく、言うなれば全くの他人同士だった。

サツキはこの男について何も知らない。唯一わかることといえば、

名前がケンだということくらい。

もともとこの山の近くに住み、山歩きが好きだったサツキが、ある日偶然小屋を見つけてケンにばったり会ったのがそもその始めだったが、この世間離れした小屋で風変わりな交流を続けるうち、今では素性も生い立ちも何も知らないこの男にとっても懐いていた。

「ね、今日も倉庫見せて？」

「倉庫……」

ケンはまた布団にボタンと横になった。

「おまえ、そんなもの見に、わざわざこんな朝早くに来たんか」

「そんなものって、あんな楽しいところ他にないよ」

サツキは、ケンの小屋の倉庫に置いてあるものを眺めるのが堪らなく好きだった。

この小屋には、小屋と同じくらいの大きさの倉庫がある。倉庫の中には、骨董品屋でしかお目にかかれないようなもの、そして何なのかよくわからないようなキテレツなものたちが山と積んである。……なんでこんな変なものが山ほどここにはあるのだろう？どれもこれも歴史の教科書に出てきそうな、下手したらどこの国のものなのかもわからないようなものたち。

そして、ケンの一風変わった生活を覗くのもサツキにとってはかなりエキサイティングな体験だった。

サツキが見る限り、ケンはほとんど自給自足の生活をしているようだ。畑で野菜を育てたり、山に食料や薪を探しに出たり、といった生活の時間以外は、造詣が深いらしい武道の修練に汗を流しているその様子を眺めたり、果ては手ほどきを受けて木刀を振り回したり。……少なくともサツキの周りには、こんなに面白い生活をしている人間はいない。

「いつも思うけど、変だよお前……女の子が興味持つようなもんじ

やないぞ」

「女の子の子って言わないでくれる？」

フンと鼻を鳴らして、サツキは立ち上がった。

「起きて起きて！早起きは三文の得」

はあっとため息をつくとき、ケンはあきらめて立ち上がった。……とりあえず、言って聞くような相手ではないというのをよく解っているのだ。

ケンはようやく布団から出て身支度を整えると、小屋の一番奥にある小さな上げ扉の取っ手に手をかけ、力をこめてその扉を持ち上げた。

ぎぎ……と軋んだ音をたてて扉が上にあがる。人一人やっと通れるほどのぽっかりと空いた穴に懐中電灯の光を注ぎ、ケンはほら、と横のサツキに向かってあごをしゃくった。

「足元気をつけろよ」

「うん。大丈夫」

サツキも慣れた手つきで懐中電灯を向けると、穴に足を入れる。そこには階段がついているらしく、サツキは体を縮めてその穴の下に潜っていった。サツキは身長が高いほうではあるが、体を屈めてやっと頭がつかえないくらい低い天井。朝の光に慣れた眼には、最初右も左もわからない暗闇である。手探りで近くの棚を探し、それにつかまってどうにかバランスをとった。

すぐ後ろから、ケンも降りてきた気配がする。懐中電灯の光が二つになり、ようやく周りの様子が見えるようになってきた。……倉庫中に所狭しと棚が作っており、その棚にごちゃごちゃにたくさんものが置いてあるのがばんやりと見えた。

何回も来て見慣れた景色ではあるが、いつ来てもサツキはその数と、その奇妙さに圧倒された。

ほんとうに、ここにあるものは変なものばかりだ。……いったい何に使うかもわからないような金属の塊。たくさんの木彫りの像、……何を彫っているのかさえわからないものも多い。セピア色に変色した本の山、……表紙に書かれている文字はほとんど全て判別不能である。

その隣には、重厚な巻物が山と積まれている。後は生活用品とおぼしきもの、けれどどう見てもここでは使いそうもない厚い厚いマントやブーツ、……エトセトラ、エトセトラ。

それらのものを横目に見ながら、今まで行ったことのない倉庫の奥のほうに目星をつけて進んでいたサツキは、ふと棚と棚の間に無造作に突っ込まれている棒状のものに眼をやった。

柔らかい布で巻いてあるそれを、何気なく掴んだその感触にある予感を覚えて……急いで布を取ってみると、……果たして出てきたのは、一振りの剣だった。

その剣はまっすぐな細身の剣で、いわゆる日本刀とは少し感じが違うものだった。鞘と柄の部分には細かく上品な彫刻が施され、この剣の価値の高さを思わせる。……サツキは剣をつかんだまま、ケンのいる入り口のほうを振り返った。

「ねえ、この剣、触ってみてもいい？」

「……ああ、いいよ。気をつけろよ」

ケンの返事を聞きながら、サツキは剣の柄に手をかけ、刃を抜こうと力を込めた。

抜こうとしてみたものの、正直すぐに抜けるとは思っていなかったが、意外にも刀はするりと鞘から抜け、……思いがけず現れたその刀身の美しい銀色に眼を奪われる。

懐中電灯の光をまぶしく反射したそれは、もうほとんど白といっ
ていくらいの銀色に光り、見たこともないようなその刀身の細さ
と美しさに息を呑んだ。

「うわ……すごい……。」

きれい。全然錆びてない。ケン、手入れしてるんだ？」

「……いや、してないよ」

「えっ？」

そんなはずはない。剣は刃の手入れを丁寧にしないと、すぐに錆
びて抜けなくなるはずだ。……こんなに美しいままであることなど
絶対がないのに。

刃を鞘に収めながら、訝しむサツキの表情を読み取ったのか、ケ
ンがニヤリとするのが見えた。

「その剣は錆びないよ。——何しろ生きてるからね」

「……は？」

ぽかんとしたサツキの顔を見て、ケンはおかしそうに続けた。

「その剣は並大抵じゃない。名前も持っているしな」

「……名前？」

ケンは眼を見開いたままのサツキの横まで来ると、鞘に刻まれた
彫刻を指差した。

「ほら、ここ。古代文字だからわかりにくいが、ここに名前が彫っ
てある」

「……何て読むの？」

「ティ・リ。ティリだよ」

ティ、リ？……これがこの剣の名前？

なんだ、それ？

混乱し始めたサツキをよそに、ケンはそばに落ちていた腕輪のよ

うなものを拾いあげて熱心に眺めている。既にサツキと、ティリと呼ばれた剣のことは興味から外れたらしい。

とりあえずあとで考えよう、と混乱を奥のほうに押し込んで、剣を小脇に挟んで気を取り直し、また探索を再開する。……と、剣のすぐ横の棚に置かれた、布で幾重にも包まれた四角い箱が眼に入った。何気なく布を開いてみる。

箱を開け、そこにあったものは、――鏡だった。

何の変哲もないただの鏡。シンプルな彫刻が施された木の枠に、銀色の鏡面がおさまっている。

ほとんど無感動にその鏡を眺めていたサツキだったが、……ふと、サツキはその鏡に、何か違和感を覚えた。

……何だろう？この感じは。

何もない、ただの普通の鏡なのに――どこにでもありそうな――。

サツキはハッと息を止めた。

何ということだ。

この鏡には、覗き込んでいるサツキの顔が映っていない……！

顔はおろか、何も映っていない。その鏡の鏡面には、ただ透き通った銀色が光っているだけだ。

これはそういう金属を使ってある鏡なのか？……と思いかけて即座に否定する。

どんな金属でも、これだけ滑らかに磨かれていれば、必ず何か映るはずだ。全く何も映らないなんて、そんなこと、あるわけがない……。

いったいどういうことなのだろう？

急に恐ろしくなって、サツキがケンの姿を探そうと顔をあげた……ちようどそのとき。

「サツキ！」

ケンの鋭い声が飛んで、サツキはびくっとしてケンのほうを振り向いた。

その瞬間、小脇に挟んでいた剣――ティリ――が、ガツンと何かにぶつかったような衝撃を感じて、一瞬体が竦む。

「サツキ、その鏡は――」

厳しい顔をして何か言いかけたケンのその眼が、次の瞬間見開かれ――顔色がサツと変わったのがわかった。

その表情を見返して、もうほとんど本能的にサツキは後ろを振り返り、すぐ後ろにあった棚が――おそらく、さっきティリがぶつかった棚が、自分のほうに倒れてくるのを見た。

もう逃げる時間は全く残されていなかった。

頭を抱え込む暇すらなかったが、サツキは何ごとか叫ぶケンの声をすぐ近くで聞いたような気がして、

手にしていた鏡に何かがあたって、ピシッ、とその鏡面にひびが入ったような気がして――

そこで、全てが暗闇になった。

一 復活の章 1

一 復活の章

最初に、サツキが闇と見分けがつくようになったものは、火だった。

どこまでも真っ暗な空間に、何かが蠢いている。

その何か、赤いちろちろと揺れているものは……火かな、と思ったとたん、その輪郭がはっきりとした形になった。すぐに、その場所からぱちぱちと木がはぜるような音が聞こえてくるのにも気付く。

全てはまだ闇に沈んでいたが、その火の姿が明瞭になってくるにつれて、うすばんやりと照らされるその周囲は暖炉かな、と推測がついた。

いい具合に暖かくて、ひどく気持ちがいい。……しばらくサツキはその状態のまままどろんで、うつらうつらと意識はこの場所と眠りの向こうを行ったりきたりする。

と、突然、サツキの脳裏に倒れてくる棚の映像が閃いた。

まどろむ間、少しずつ正常な状態に戻りつつあったサツキの意識が、急にはっきりと目覚めたかのように、棚に置いてあったこまごまとしたものまで、それはひどく明確にサツキに迫ってくる。

サツキはその映像を振り払うように、ぶるっと体をふるわせて体を縮めた。……あの時は、あんまり怖いとも思わなかったのに、今思い起こしてみるととても恐ろしい。

そういえば、体の節々が痛むような気がするのは、棚がぶつかったからだろうか？

そのとき、はっとサツキは、自分が時間の感覚を取り戻したことに気付いた。

あのととき?……いま?

そうだ、あれから、どのくらいの時間がたったのだろうか?

それに――それに、ここはあの倉庫ではない!自分は今どこにいるのだろうか?

目まぐるしく思考が回転し始めた。

サツキは、自分がベッドに寝かされていることを知った。薄暗い室内には、火の入っている暖炉、机、椅子。別に特徴もない、しかし一度も見たことのない部屋だった。窓に引かれたカーテンから日の光が差し込んでいたが、それはとても弱々しく、今の時刻は夕方か明け方かどちらかだろうと思わせた。

上半身だけをベッドから起こして、サツキはきよろきよとあたりを見回した。

一体どうして、自分はここにいるのだろうか?まさか、ひとりでここに来て寝たわけはないだろうが、じゃあ一体誰が自分をここまで連れてきたのだろうか?

――それに、ケンは何?ケンはどうしたのだろうか?

しばらく部屋を見回すうち、部屋の隅のほうのソファにケンが寝かされているのを見つけて、サツキは心底ほっとして溜息をついた。

よかった……。

こんなわけのわからない状況で一人だったら、なんて、考えただけぞっとする。

とにかく、ケンなら何か知っているかもしれない。聞いてみなければ。そうサツキは結論を出して、むっくりベッドから抜け出すと、ソファに近づいてケンの体を揺らしてみた。

「ねえ……ケン、ケンっ」

意味もなく潜めたサツキの小声と、体を揺らされる動きに、ケンはすぐに目をうつすらと開けた。何度か目をしばたかせて、ゆっくりと視線をさまよわせ、やがてそれはサツキの上で止まる。

「サツキ……?」

少し訝しげな眼をしたケンもまた、さっき倉庫で起こったことを思い出せずにいるのかもしれない。

今朝——つまりついさっきのことなのだが——したように、ケンは寝返りを打とうとして、そこで初めてここが自分の寢床ではなくソファだということに気付いたようだった。

寝返りをうつのをやめて、ケンはゆっくりと体を起こした。少しふらふらするのか、頭を押さえながら部屋を見回すケンに、サツキは逸る気持ちを抑えきれず顔を寄せる。

「ねえ、ケン、ここどこ?」

ケンは部屋をひと目見て、少なくともこの部屋に寝かされていたことの異常さだけは理解したらしい。

ハッとした様子で、ケンは頭を押さえるのをやめてソファの上に座りなおした。そのまま、部屋の中のものに細かく視線を注ぎながら、考える眼をして黙っている。

サツキはじりじりしながら、ケンの次の言葉を待った。

少しでも早く、この奇怪なところから抜け出したい。
その思いがサツキの心を支配していた。

頭がはつきりしてくればくるほど、あの倉庫とこの部屋との矛盾が奇怪なものに思えてくる。……心のどこかで、関わらないほうがいい、早く抜け出したほうがいい、という声が聞こえてくるのだ。

そんなサツキの心中も知らぬげに、ケンは一瞬も相変わらず部屋の中を見回していたが、ふとその動きが止まった。

——と、ケンはガバツとサツキのほうに顔だけを動かして、ぴたりとサツキを見た。その眼光に思わずサツキは体を後ろに引いた。

「サツキ、鏡は？」

「鏡？」

一瞬サツキは、何のことを言われているのか理解できなかったが、すぐに、ああ、倉庫の……と思い当たって、

「鏡ってさっきの？」

「持っていないのか」

そのはつきりした声音は落ち着いていて、ケンは何か、この場所について心当たりを思いついたのかもしれない、と感じたが、しかしサツキにはケンの言葉の意図がさっぱり理解できない。

サツキは一応、自分の寝ていたベッドの辺りを見たが、あの鏡のようなものはなさそうだ。……というか、一目見ただけのあの鏡の記憶すら、既におぼろげだというのが正しいところだと思う。

「ないと思うけど……？」

「棚が倒れてきたとき、鏡がどうなったか覚えてるか？」

どうして、鏡のことばかり訊くのだろう。

サツキはそう思いながらも、ケンの真剣さに吞まれて真面目に答えた。

「そういえば、割れたのを見たような気がする」

「割れた!？」

「……いや、はっきり見たわけじゃないけど」

瞬間眼を見開いたケンの剣幕に、びくっと体が竦む。

慌ててそう言い足したサツキだったが、ケンはもう何も聞こえていない様子で、視線をゆっくりと前に落とした。

そしてすぐにソファから降り立ったのに、サツキも驚いて立ち上がる。

「——行こうか」

一言だけそう言って、ゆっくりドアのほうに歩き出すケンの後を追いつながら、急いでサツキは尋ねた。

「ちよっと、どういうこと？どこに行くわけ？」

ふとケンは振り返って、サツキをじっと見た。

「サツキ」

その声音と表情に、明らかに悲痛の色が見えて、思わずサツキは体を硬くして——体の奥のほうで、ヒヤッとするような感覚。

何だ？

ケンは何を言おうとしている？

……これから、何が起ころうとしているのだ？

「サツキ、……これからおまえには、たくさん話さなければならぬことがある。

もし、俺の考えていることが正しければ、状況はだいぶややこしいんだ。

……とにかく、ついておいで。

たぶん向こうに、俺らを待ってる奴がいるから」

一 復活の章―2

薄暗い廊下の、つきあたりの扉の前で、ケンは一立ち止まった。

すぐに取り手をまわし、扉を前に押す。慣れた動作だ。そのまま躊躇なく中に入っていくケンに、後から従っていたサツキは何だか気後れがして、一步部屋に入ったものの後ろ手に扉を閉め、そのままの体勢で周囲を伺った。

一番奥で、暖炉の火が音をたてていた。そしてそこに鍋がかけられている。シチューのようないい匂いが部屋に充満していた。見たところこの部屋はダイニングルームといった感じで、この部屋もまた必要最低限の家具しか置いていない質素な造りであった。

「久しぶりだな」

ケンが言葉を発するのを聞いて初めて、サツキは食卓の端、ケンの体にちようにど遮られて見えない場所に人が座っているのを知った。

しかし今、ケンは「久しぶり」と？

……この人物に前にも会ったことがあるのか？

さつきケンが言っていた、自分たちのことを待っている奴がいる、とは、この人物のことだろうか。

「うん。10年ぶり」

静かな声が答える。

サツキは首を伸ばし、ケンの体の後ろからその声の主を一目覗いてぎょっとした。

銀髪なのである。白髪でもない、灰色でもない、光沢のある銀髪。しかも、その瞳の色は青―紺、といってもいいくらいの濃い青。

きれい、と思わずそう思ってしまったしながら、しかしその見たことのないような髪と瞳の組み合わせに息を呑んだ。……初めて見たその色味に、またどこか混乱が増すようなその感覚。

その男はどのくらいの歳なのだろう、20代前半くらいか——サツキより少し年上くらいだろうか。流れるような銀髪を後ろで束ねていて、その口許や声には大人びた雰囲気滲んでいたが、こちらを見据えている眼の強さが、顔全体の印象をどこかアンバランスなものに仕上げていた。

「まず食べろよ。腹減っただろ。……座って」

男の声にケンは無言で頷き、食卓の椅子を引いて座った。サツキも後から従って隣に腰掛ける。

しんとした静寂の中、さつきからケンとこの男の間に横たわる言葉が必要としない空気に、サツキは圧倒されていた。

もう二人は、空気を介してたくさんの会話をしていて、サツキにはわからない何かの合意に達しているような、そんな感じだった。……そしてその合意がおそらくあまり喜ばしい内容ではないことも、その重苦しい空気から何となく察しがつくような気がした。

とん、と目の前に、スープの入った木の皿が置かれた。

その匂いをかいだとたん、ぐう、と胃が反応するのに自分でも驚く。……どうやら自分はものすごくおなかが空いていたらしい。横のケンがさっさと匙を取り上げ食事を始めるのが見えた。

まだ全然自分の置かれている状況が飲み込めないし、自分がここにいるのは場違いのようで居心地が悪いが……とりあえず、食べたほうがよさそう。食べて、エネルギーを補充しなければ。

そんな気分になって、サツキは横に置かれた匙を取り上げた。いただきます、と食べ始めたスープの美味しさと暖かさに、夢中になって匙を動かす。

——しばらくは、誰も無言だった。

例の男は、食卓の端に座って頼杖をついたまま暖炉の火を見つめているし、二人も黙って黙々と食べ続けていた。

そのうち、ケンがこの男のどちらかが、この重い沈黙を破って本題に入らねばならないこともなんとなくわかっていたが、少なくとも話を切り出すのは自分ではないのだ。……そんな気楽な気分で、サツキは食べ物を口に運びながら、どちらかが話を切り出すのを今か今かと待っていた。

「コーリン」

と、唐突にケンが食卓の端の男に向かって呼びかけた。

コーリン、と呼ばれたその男が、顔を少しずらして視線をケンのほうに向ける。

カツ、と木の匙を空になった器に投げ入れると、ケンは器を前に押しやって静かに続けた。

「すまない。……鏡を割ってしまったんだ」

男——コーリンは、ケンのほうに視線を向けたまま、全く表情を変えなかった。

その眼に宿る光を見て、サツキはハッとした。……さっき、ケンがサツキに見せたのと同じ、悲痛な——重たい光が、瞳の奥に見えたような気がしたのだ。

「鏡が割れて、奴の封印が解けてしまった。

奴はそのまま、『扉』をこじあけてこっちの世界に戻ってきて……俺らも巻き込まれたんだと思う」

コーリンは無表情なまま頷いた。

「――何となく察しはついてた。多分そうだろうな」

「コーリン、すまん……。こんなこと言っても始まらないのはよくわかってる。けど、俺としたことが……。鏡を割ってしまうなんて。ほんとうに、すまない」

コーリンが微かに首を横に振ったような気がして、……。ふとコーリンは立ち上がると、部屋の隅の机に行き、何かを手にとった。

それは紛れもない、さっきサツキが手にしていた鏡の――しかし鏡面のない外枠だった。

ケンの家の倉庫でサツキが見た、何も映さない銀色の鏡面は跡形もなく失くなっており、ただの木の枠だけが残っている……。それはとても不完全な、不安定な形だ、と咄嗟に感じた。

食卓に戻って椅子に座りながら、コーリンは自分の前にその鏡の枠をことり、と置いた。

「お前たちは神殿に倒れていた。――『扉の間』にな。横にこれが落ちてたから、鏡に異変があったのはすぐわかったよ。

確かに最初は驚いたけど、仕方ない……。これからのほうが重要だろ」

ケンの表情からは悲痛の色が消えることはなかったが、少しほっとしたようにため息をつく音が聞こえた。

「……ありがとう」

そしておもむろに、ケンはサツキのほうに視線をやった。

「コーリン、こいつはサツキだ。鏡が割れたときたまたま近くにいて、巻き込んじゃった。

……話してもいいか？」

コーリンは無言で頷く。その頷きを合図に、ケンは改めてサツキのほうを向いた。

話の筋が全く見えないながらも、二人のやりとりを黙って聞いていたサツキだったが、緊張を含んだケンの表情に、思わずその顔と

言葉に意識を集中させる。

「いいか、サツキ、よく聞いて。

……ここは、さっきまでいたあの山の中じゃない。あの山の近くでもない。

ここは、あそことはまた別の世界なんだ」

「……えっ!？」

別の世界？

ケンの言葉に、思わず驚きの声が漏れたが、……でもその一方、どこか心の奥のほうで、妙な納得が生まれたのも、また確かだった。見たこともない石造りの部屋、……そして見たこともない髪と瞳を持つ人間、

それら不思議の全てがストーンとどこかに落ちていくような感覚。

サツキの反応をある程度予想していたのだろう、ケンは変わらない静かな調子で続けた。

「……驚くと思う。いきなりそんなこと言われたらな。信じろってほうが無理だ。

あの山の、俺の家がある場所、あそこには特別な力が宿っているんだ。

こちらの世界では『扉』と呼んでいるが、俺が住んでいたあそこ
の場所は、俺らが今居るこっちの世界とつながっているんだ。……
いや、厳密には、つながっていた、んだ」

「……つながっていた？」

サツキは唇を引き結び、耳を澄ませて、ケンが話し始めた不可思

議な話をひとことも聞きもらすまいと意識を集中させた。

「俺はもとからこの世界の住人だったわけじゃない。サツキと同じ向こうの世界の人間だし、あの山のそばに住んでいた。

10年前、俺は全くの偶然に、今の自分の家、つまり『扉』がある場所を歩いていて、こっちの世界に来てしまったんだよ。

俺は昔から、靈感とか超能力みたいな変な力が少しあったんだ。

普通は『扉』に足を踏み入れたぐらいじゃこっちに移動してきたりしないんだが、多分俺の力が関係してたんじゃないかと思う。

こっちに来てしまった俺を、ここにいるコーリンの親父が助けてくれた。……でもそのとき、こちらの世界は大変なことになっていた」

そこでケンは口を閉じ、一息ついた。サツキもコーリンも、ケンのお話に引き込まれているのだろう、相槌もうたず黙って聞いている。

サツキは少しずつ、自分の中で、いくつかのパズルのピースのようなものが形を作り始めたのを感じていた。……なぜケンがあんな山の中に一人で暮らしていたのか。家の中や倉庫にあった、生まれて初めて見るようなものたち。

「この世界はな、五つの島から成っている。ここはパルミゾイル。

『冬』の島と呼ばれている。

後は、『水』の島ヒュミルレイン、『砂』の島ダーマキリア、『森』の島エチトラクス、そして『闇』の島アディーザ。……カタカナの名前ばかりで混乱するよな。

この五つのうち、『闇』の島は、わしらとはまた違う種族、『精霊』が支配しているんだよ。

精霊っていいってもピンと来ないだろうが……精霊は人間と違って明確な体を持たない。俺らの世界という幽霊みたいなものと考えた

「に近いかも知れんな」

そこでまた一拍おいたケンが、ふうっと息をつく音が聞こえて、話が核心に入りつつあるらしいのを感じ取る。

「そして、10年前、俺がちょうどこちらの世界に来たとき、……その精霊の王セラティムが、人間の住む島を乗っ取るために攻め込んできたんだ。

これまで人間と精霊の間には、争いなど起きたことがなかった。もともと精霊は特に人間には関心を持っていなかったし、うまく住み分けができていたんだろうな。

しかし、セラティムは違った。やつは、これまで精霊が持っていなかった概念——欲望、に満ちた存在だった。そしてやつは自分の欲望を満たすためにだけに、人間と戦いを始めた」

精霊——明確な体を持たない存在。そしてその精霊の王、セラティム。

サツキはケンの口から次々に飛び出してくる、常識を遥かに超えた単語を頭の中で整理するだけでやっとだった。

しかし、ケンの話していることが全て本当であることは疑いようがなかった。

……ここは、ついさっきまでサツキが居た世界とは、全く別の世界なのだ。

「セラティムの強大な力の前に、明らかに人間のほうは分が悪かった。

俺も一緒になって懸命に戦ったが、あと少しでこの島も征服されてしまうところだった。そこで使われた最後の秘策が、『封印鏡』だ。

封印鏡はこの、冬の島に古代から伝わる宝器だった。人間たちは

何とか力を合わせて、セラティムをこの封印鏡のなかに封印したんだ。

そして、『扉』から封印鏡を違う世界——つまり俺がもっていた世界に移した。俺がその鏡の番人役を買って出た。

それから『扉』は破壊された。もう二度と、セラティムがこちらの世界に戻ってこれないように」

ケンはまだそこでいったん口をきった。……と、コーリンが後を継いで口を開いた。

「おまえたちの世界は、おそらく様々な力の存在や影響力がこちらの世界よりずっと小さい。

だから封印されたセラティムも、十分な力を使えず、永久に封印鏡の中に留まるだろうと、封印が破られることはないだろうと考えられていた。

……でも、封印鏡は割れた。

割れた瞬間、セラティムの封印が解け、奴はこの世界に戻ってきた。破壊したはずの『扉』を、その力でまたこじあけて。……そして傍にいたおまえたちも、巻き込まれたんだ」

ぷつりと言葉を切ったコーリンの顔を見据えたまま、サツキは全く微動だにしなかった。

……いや、できなかった、というほうが正しい。

それは、つまり、どういうこと？

自分がさっき見ていた鏡は『封印鏡』という、精霊の王セラティムを封印した鏡だった。

その封印鏡が割れ、セラティムの封印が解けて、セラティムはこちの世界に帰ってきて……。

壊れた『扉』を無理やりこじあけて……。

——バチッ、と突然サツキの思考の中で一つの事実が浮かび上がった。

「ちょ、ちょっと待った！」

思わずサツキはガタン、と立ち上がっていた。

「——あたし、もとの世界に帰れるの？」

サツキが覗き込んだケンの顔は、ますます悲痛な表情になっていた。

そうか。さっきからケンが深刻そうにしていたのは、こういうわけだったのか……。

でも、自分の勘違いであってほしい……。

「サツキ。『扉』は10年前に、確かに破壊されている。

……もう、『扉』を使ってもとの世界に戻ることは、できないかもしれない」

やっぱり、という確信とともに、サツキは自分の全身から血の気がひくを感じた。

そしてその血液が全部口許に集まってきたかのように、サツキは次の瞬間、怒鳴っていた。

「ちょっと！！そんなの冗談じゃないって！！」

冗談じゃない！永久にこの世界で暮らせというのか！？そんなこと、できるわけがないだろ！！

何とかしてよケン！！と詰め寄ろうとしたそのとき、コーリンが口を挟んだ。

「待て。方法がないわけじゃない」

眼で『座れよ』と合図するかのような、その視線に抗いがたいものを感じて、渋々また席につくサツキを見遣りながら、コーリンが続ける。

「ここは冬の島パルミゾイルの、風の神を祀る神殿だ。『扉』はこの神殿の奥にある。おまえたちもそこに倒れていた。

本来、封印鏡もその『扉』と同じ場所にあるものだ。あれは『扉』の一部。

封印鏡がもとの完全な形に戻って、力を持てば……もしかすると『扉』を復活させることができるかもしれない。『扉』を復活させて、お前たちの世界と繋げることができるかもしれない」

完全な形の封印鏡……？

「もちろん、復活させられないかもしれない。可能性は低い。けど、今はそれに賭けるしか方法はないと思う」

今や不完全なその封印鏡を、元に戻すということは……。

「その、完全な形の封印鏡って……つまり、枠だけじゃなくて、鏡面もあるってこと？」

聞きながら、サツキはある嫌な予感が頭の中に広がってくるのを感じていた。

コーリンが頷くのを見て、さらに言葉を重ねる。

「鏡面をこの鏡の枠に戻す、って……どうやって？」

「……鏡面に戻すには、復活したセラティムをまた封印するしかない」

やっぱり……。

サツキはもうほとんど理解していたが、諦めきれずにさらに聞いた。

「それってやっぱり、セラティムは封印なんてされたくないだろうから、無理やりに封印するの？」

それまで無表情を保っていたコーリンは、一瞬黙った。

しかし押さえ切れなかったらしく、コーリンは次の瞬間『馬鹿かいっ？』という表情を顔いっぱいに広げた。

「——おまえ、何意味わからないこと言ってるの？
当たり前だろ！戦って無理矢理封印するの！！」

一 復活の章 3

間髪を入れる隙も与えず、コーリンは立ち上がった。

「準備するぞ」

ボタンと入口の扉を開けて外に出してしまう。取り残されたサツキは、むっとしながら続いて立ち上がった。

あそこまで露骨に呆れた顔しなくてもいいんじゃないか？……まあ、自分でも、かなり答えのわかりきった質問だとは思ったけれど……。

はあっとため息をついてから、サツキはケンについていくつもりでそちらを覗いたが、ケンは出て行ったコーリンにはあまり関心を示していない様子で、部屋の中を見回している。

と、ケンは立ち上がり、扉とは逆の方向、さっき封印鏡の枠が置いてあった机のほうに歩いていき、何かを手にとってまた戻ってきた。そしてすれ違いしなに、サツキに手に持っていた何かを押し付けた。

それは、剣——ティリだった。鞘の装飾が記憶に新しい。

そうか。鏡が割れてしまったとき、あたしはこれを脇にはさんでいて……。

「こいつを持っていけよ」

ケンは言いながら、そのまま部屋を横切り、扉を開けて外に出た。慌ててサツキも従う。

「きつと、おまえの助けになってくれると思う。こいつはただの剣じゃないからな」

言いながら、ケンは廊下に出てすぐ側にあった別の扉を開ける。もうコーリンはいないというのに、完全に地理をわかった動作だった。

部屋の中は、物置だった。小さな窓しかないため薄暗く、その全貌はぼんやりとしてよく見えないが、コーリンが奥のほうで、何やらごそごそと探しているようなのが何とか確認できる。

サツキはドアを閉め、改めてティリを鞘から抜いてみた。――果たして、見事な銀色の刃が、するりと引き抜かれた。

その剣を握った感触、刃の光を見て、サツキはどきつと息を止めた。――さつき、こちらの世界に来る前、倉庫で持ったときとは、全然感じが違う。

何というのだろう、美しい、というのか――倉庫で刃を抜いたときよりも、ずっとその銀色が煌いていた。薄暗いこの部屋の中でさえも。まだ鏡が割れる前、朝の倉庫でケンが「生きているからね」と言ったその言葉の意味が、今なら何となくわかるような気がする。

「ただ、そいつの扱いには気をつけろよ。意志のある剣だ。かなりの力を持っているが、持ち主を選ぶ」

……持ち主を選ぶ？

刃を鞘におさめたながら、目を丸くしたサツキに、ケンは大きく頷いて、面白そうにニヤリとしてみせた。

「ティリは自分を使う者を選ぶ。持ち主と認めない者には決して従わない。

……まあ、サツキなら大丈夫だと思う。剣の腕も確かだし」

剣の腕って……。

確かにサツキは中高と剣道部だったから、竹刀を振り回す要領でいいのならば、剣も扱えるのかもしれないが……実践的な剣術は、ケンに少し教えてもらったただけなのだけど……。

大丈夫だ、とケンはかなり自信満々に言ったが、その自信はいつたどこからくるのだろうか？

かなり絶望的な気分でサツキはそう思ったが、口に出す余力もなかった。

やっぱり、あたしには無理な気がする。

そのとんでもなく強いらしい精霊の王、セラティムを封印だなんて。

もちろん、あたしは何の役にもたたないだろうけれど……ケンやコーリンたちと一緒に行動するだけでも足手まといだろう。そして一緒に戦う武器は、この「持ち主を選ぶ」剣、ティリ。

……これで話が進んでいくなんて、どう考えてもおかしくないか？？

鬱々と考え込んでいたサツキの顔に、バサッ、と何か重たいものがあるにぶつかった。

わっ、と驚いて見れば、投げつけられたものは分厚いマントだった。顔をしかめながらそれを拾い上げ、投げつけてきた方に目をやった瞬間、次は金属製の軽い胸当てが飛んできた。慌ててそれを受け止める。

「これ何？」

その言葉には、いきなりものを投げつけられ、ムツとしたサツキの内心があからさまに滲んでいたが、投げた主コーリンは、何食わぬ顔つきで物置を漁りながら、

「おまえも防具ぐらい身に着けたほうがいい。あと、マントも」
「……マントはいらないよ」

防具は確かに要るのかもしれないが、こんな重たいマントもろに投げるなよ！

さらにムツとしながら、手にしていたマントを返そうと腕を突き出したサツキに、コーリンはちらっと視線を投げたが、フンと鼻を鳴らした。

「……要らないってならそれでもいいけど。凍え死ぬよ」

「凍え死ぬ？」

そういえば、とサツキは周囲に注意を向け、思ひだしたようにあたりの寒さを感じる。さっきまでは暖炉の火のおかげで気付かなかったが、この部屋はとても寒い。……こちらの世界に来る前は、暖かく薄着だったので余計だ。

何だか、冷気が足下から忍び寄ってくる感じで、……さすが、『冬の島』というだけあって、冬が支配しているとはこういう感じか。

五感が訴える欲求には滅法弱いサツキは、大人しく防具とマントを着込んだ。少し重いが、これで体の動きを制限されることはなさそうだ。

ケンも、部屋の隅で身支度をしている。

一風変わった、不思議な形の衣服を纏っていた。肩や胸など、必要最小限の部分に、皮でできたと思われる防具をつけ、その防具を止め具として、びっしりと刺繍が施された布が体に巻きつけてある。……この布には力が込められており、強固な鎧と同等に衝撃から体を守るのだ。

手には、木でできた杖。杖は、ちょうど手首から肘までの長さくらいのもので、特に目立った装飾は施されていなかったが、先端に透明の美しい石がはめ込まれていた。その石が、ときおり虹色に輝くのが見えた。

その石は、ここ冬の島、パルミゾイルで採れるものだ。俗に「放ちの石」と呼ばれる。

10年前、ケンが、ここにいるコーリンの父親、アイルに渡されたものだ。風の神殿の宝器であり、……ここまで素晴らしい大きさと色合いの「放ちの石」は二つとない、と、アイルはよく言っていた。

ケンは愛おしそうに、その杖に手のひらを寄せる。

10年前、セラティムの封印が終わりもといた世界に帰るとき、この世界から永久に別れを告げるのだろうという思いの中、持って行こうか一番迷ったのがこの杖だった。

散々悩んだ挙句、持って行って杖の魔力が弱くなってしまうよりは、残して誰かに使ってもらったほうがいい、と、残していくことを選択したのだ。

神殿に安置していたはずのその杖を、……恐らく、コーリンがここまで持ってきてくれたのだろう。

まさかまた会えるとは。また一緒に戦えるとは。

セラティムの封印が解けたことは確かに悲劇だった。

10年前にセラティムを封印したときの、あの悪夢のような日々が蘇る。セラティムのあの圧倒的な力と、一人、また一人と倒れていく仲間たち。――また再びセラティムを封印することも、困難を極めるだろう。うまくいくかどうかともわからない。

しかし一方で、コーリンや、その当時愛用していた道具に再会で

きたことを素直に喜ぶ自分がいた。その気持ちは、時間が経つにしがたがって強くなってきていた。

——悪くない。

そしてまた、あの体中の細胞がひっくり返るような、戦いの感覚を味わえることも。

そう思っている自分に気付いて、ケン是一人苦笑した。

……自分ときたら、おそろしく不謹慎だな。

おそらくその冷静な表情のうしろで、自分よりずっとことの重大さを真剣に受け止めているはずのコーリンと、わけのわからないまま巻き込まれ、不安でいっぱいのはずのサツキ。

何としても、この二人だけは護らなければならない。……それが自分の役目だ。

コーリンは、ここ風の神殿に務める神官である。

神殿に入るときは、正装である法衣を身につけるのが決まりだった。襟と袖がきっちり詰まった、紺色の上下は、普段生活しているときも着ているが、その上に、うす緑色の、ローブのようなものを巻きつけるのだ。

紺色の衣服も、よく見ると肩や胸といった重要な部分はしっかりと保護できるよう、目立たない金属で覆ってある。防具としての役割も兼ね備えているのだろう。

「しかしおまえが、ほんとうに神官になるとはな」

コーリンの身支度に視線をやって、ケンが面白そうに声をかける。

「いくら親父が神官だったからって、適性ってもんがあるだろう。」

昔っから剣を振り回してばっかりだったというのに」

コーリンも思わず、といった体でふふっと笑って、……10年前と全く変わっていない、とケンと思う。

いつも無表情、冷静にみえるその隙間から、微かに漏れ出てくるような笑顔。

「適性もなにも、普通にやってるよ」

「剣の修練も続けているのか？ 神官には必要ないだろう」

「もちろん。神聖魔法よりずっと得意だ」

「そうなのか？」

ははっと笑ったケンにニヤリと笑みを返しながら、腰にベルトを巻き剣を提げたコーリンは、傍に置いてあった帽子を抱えた。服と同じ色の、縦長の帽子である。その帽子の表面には、控えめではあるが羽根の装飾が施され、ひどく美しい。

「ここは風の神殿の住居部分だ。ここから出て、少し歩いたところに神殿があるから」

視線を回し、サツキとケンが身支度を終えているのを確認してから、……いくぞ、とかけたその声は、……もしかしたら、自分自身に向けた声だったのかもしれない。

そのまま、物置を出て廊下に戻る。

早足で進んだ廊下の突き当たり、大きな扉を開けた途端、凍てつくような風が吹き付けて、一番後ろにいたサツキは、瞬間ひゅっと首をすぼめた。

ほんとに、物凄く寒い……なにこれ……。

サツキは心底この分厚いコートに感謝した。

太陽が真上にある。

昼間だというのに弱々しい太陽の光を受けて、白銀の世界がそこに広がっていた。

すぐ右手に、石造りの大きな建物がポツンと見え、おそらくはそれが風の神殿だろう。ぽつぽつと雪にあいた無数の足跡が神殿のほうに続いており、道を形づくっていた。

サツキはその道を見ながら、世界は違っても太陽とか雪とか景色は変わらないんだな、と場違いなことをぼんやり考えていた。

コーリンを先頭に、三人は歩き出す。建物から離れるとすぐに、ますます風の強さは増し、サツキの思考は否応なしに現実に取り戻される。

サツキは、自分の意思とは関係なく進んでいく話の展開に思いを馳せ、心底寒気がした。……断じて、この寒さからではなく、体が震えた。

……あたしと、この剣、ティリと、セラティムの封印？

ああもう……本当のこととはとても思えない……。

けれど、これ以外にストーリーは残されていないのだ、ということもサツキにはよくわかっていた。

——とにかく、何も考えず神殿に行くしか、今あたしに道はない。

顔に吹き付ける風が、とても寒かった。

一 復活の章 4

先頭を歩いていたコーリンが、その大きな建物——風の神殿——の扉に手を掛けるのを見て、サツキは心底ほっと胸を撫で下ろした。その建物はすぐ近くに見えてはいたのだけれど、そして実際大した時間にもかからずに到着したのだが、この寒さときたらただものではない。雪の道を踏みしめる足は、分厚いブーツを借りて履いているにもかかわらず、すっかり冷たくなってしまっている。

いかめしくそびえる神殿の門の脇、通用門らしい小さな扉からコーリンは神殿の中に滑り込んだ。ケンとサツキも続いて中に入る。これでもかと積もった雪が、全ての音を吸収してしまうかのようなだった外の世界は、サツキにとって十分に静かだったが、それでも、建物の中に入ったサツキの耳に、キーン……という静寂がぶつかった。

それは静かというよりも、もっと違った、何か重さのあるもののような気がした。大きな岩を積み上げて造られた神殿の、苔むした壁や天井が持っているであろう重厚な歴史が形作るものなのだろうか。少しの音さえ、そのもののなかでは増幅されて際限なく響きそうなの、その静寂。

三人が入り込んだその部屋は、どうやら玄関口と更衣室を兼ねたような場所のようだった。

コーリンはさっさとブーツとマントを脱ぎ、壁の一面に設置されたロッカーのようなスペースに仕舞いこんでいるところだった。ケンとサツキも従う。

サツキは、さっき身支度したとき、通常履いている靴の上から履くタイプのブーツを貸してもらっていた。もとい世界では見慣れない靴だったが、ここのようにひどく寒い地方では重宝するのだろ

う。ブーツを脱ぐととても足が軽く感じる。

神殿の中は、どういう仕組みかはわからないが暖房がきいているらしく、暖かい。サツキは生き返る心地がした。

カツ、と靴の音を響かせて、コーリンはその部屋の入ってきたほうと反対側、隅にある小さな扉を開けた。

おそらく神殿の内部に通じていると思われる、その奥は明るいのだろう、扉が開くと同時に光の筋が伸び、薄暗い部屋が明るくなった。そして、すぐに人影が現れる。

どうやらその人物は、神殿の入り口を守る神官のようだ。きつちりと着込んだ紺の服と、その上を飾る薄緑の布、頭に乗せられた帽子は、コーリンと全く同じだった。

「ああ、コーリン。おはよう」

コーリンの姿を認めるなり、手をあげながら笑みを漏らしたその若い神官は、コーリンと知り合いのようだった。

気安い口調で挨拶すると、彼はコーリンを通すべく身を引きかけたが、次の瞬間「あっ」と声を出した。

「コーリン！ 剣を提げたままだぞ。神官の帯剣は厳禁だろう、知っているだろ！？」

神官の言葉が耳に入っているのか、足取りを全く変えず奥に入ろうとするコーリンを見て、なおも何か言おうとしたその神官を、コーリンはさっと手のひらをあげて制した。

「カイ、すまん。でも緊急事態なんだ。――セラティムの封印が解けた」

「セラティム……？」

カイ、と呼ばれたその神官は、一瞬狐につままれたような顔をしたが、すぐにその言葉を理解したらしい。

「――何だって!？」

よほど驚いたらしく、息をのんで、

「本当か!？どこからそんな事――」

「とにかく、本当なんだ。見ろよ」

コーリンは腰につけた袋を探ると、封印鏡の枠を取り出してカイに見せた。

カイはそこに微かに彫られている模様を一目見るなり、あ、と声を出して、

「これは確かに、封印鏡のしるし――」

言葉を切ったかと思うと、すぐに体の向きを変え、

「神官長どのに知らせてくる。お前は封印の間に行くのか？」

「ああ。とりあえず行ってみる」

「頼んだぞ!」

言うなり、奥に駆け出した。コーリンもすぐに早足で、別の方向に向かって歩き出す。二人も後に従った。

コーリンのすぐ後についていたケンが、ちらりと走っていくカイを見ると、

「コーリン、封印の間に行くのか？おそらく奴はとっくの昔に体を

取り戻して、別の場所に移動していると思うが」

「俺もそう思うけどな。とりあえず、確かめてみたほうがいいだろう。今のところ他に行くあてもないし」

この神殿には、窓は全くなかったが、壁に一定の間隔でうすい緑色の石がはめ込まれ、その石がぼんやりと光っていた。

その淡い緑色の光は、周囲の苔むした壁と、歩き続ける三人の姿をぼんやりと照らす。……その光景はまるで、神殿という得体のしれない生き物の奥深くに、三人が飲み込まれていくかのようだった。

コーリンとケンの二人は、周囲の様子など目もくれず早足で道を急いでいる。

サツキは、前を歩く二人に遅れまいと、出来る限り歩く足の動きを早めながら、声を出した。

「ねえ、封印の間ってなに？」

ケンは歩くスピードは緩めずに、少しだけ顔をサツキのほうに向けた。

「封印鏡には、奴の魂が封印してあった。抜け殻として残った『体』を安置していた場所が『封印の間』だ。」

その部屋も強力に神聖魔法で封じてあるが、セラティムの力をもつてすればそんなものはすぐ破られるだろう。……おそらく奴は、封印が解けてこちらの世界に戻るとすぐに自分の体を取り戻しに行き、もうどこか他の場所に移動しているはずだ」

「着いたぞ」

ケンが話し終わるのとほとんど同時に、コーリンがそう言うなり立ち止まった。

危うくその背中にぶつかりそうになりながら、何とかサツキも立ち止まる。

「――何か、奴の居場所の手掛かりがあればいいけど」

そこは、壁一面を覆ういかめしい扉で行き止まりになっていた。独り言のように呟いたコーリンの声が、思った以上にその扉から跳ね返り響いて、サツキの背にぞくりと震えが走った。

その石造りの重厚な扉は、これまで通ってきた神殿のどこよりもさらに時間の重みを感じさせ、来るものを拒む意思が確かに感じられた。

おそらく、セラティムはもうここにはいない、と、わかってはいても。……怖い、とサツキは思わずにはいられなかった。

コーリンは、目の前にあるその大きな扉の取っ手に手をかけた。

……少し力を加えただけで、扉が難なく動き、手前に引かれる感触に、コーリンはふうっと息を吐いた。

「やっぱりな、……封印の神聖魔法が破られている。

普段なら、俺たち神官でも中に入れない場所のはずだ」

そしてコーリンは、するりとその身にまとったローブを脱いで、扉の横に置いた。

……ローブを傷つけまいという気遣いだろうか……。

「――開けるぞ」

張りつめた声が響き、ピン、と空間に緊張が走る。

コーリンはそのまま、ためらわずに一気に扉を引き開けた。

その、厳めしい扉の外見と研ぎ澄まされた空気の割には、呆気なく扉は開いた。

取っ手を引いたコーリンの手の動きに合わせ、前に出てきた扉の向こうの闇は、突然、その空間の上下を繋ぐ黒い帯が現れたかのように見える。

コーリンは素早く体をその中に滑り込ませた。すぐ後ろをケンが続き、最後になったサツキは、音を立てないように静かに中に入ると、慎重に扉を後ろ手に閉めた。

扉が閉まると、その部屋の静寂が、サツキにはのしかかるように重く感じられた。

ほんとうに、堆積する、とはこういうことを指すのだろう。何年も前から積もった、そして将来も約束された静けさ、とでも言おうか、サツキたちが中に入ったくらいでは決して壊れないような。

この部屋はこうして、ほとんど永久に近い時を過ごすはずだったのだ。……このまま、何も起こらなければ。

部屋の中は照明がほとんどなく、ところどころにいくつか光る石が配置されている程度だ。その光にうすぼんやりと照らされる中がらんとだだ広く、まったく何の気配もない。

——やはりセラティムはもういないのか、とサツキが思いかけた、そのときである。

部屋の中央が、いきなり青白くぼうつと光った。

それはそこまで強い光ではなかったが、周囲の様子を映し出すのには十分な明るさだった。部屋の中央に石造りの台があり、その上

にガラスのような透明な材質で出来た、四角い箱の形をしたものが置いてある。……その箱の中が、ぼうっと光っているのだ。

光が見えた瞬間、視界がその箱の姿を捉えて、コーリンはハッと息を詰め、身を硬くした。

光っている箱は、10年前にセラティムの体を封印したものだ。間違いない、この目で見たのだから。

今の今まで、コーリンはあの箱が粉々に破壊されているか、もしくは跡形もなくなっている光景を想像していた。しかしその箱は無傷で、しかもその中で、何かの存在が光を放っている……。

「セラティムだ……」

信じられない、という苦い思いとともに、瞬時にして押し寄せる理解。

あの容れ物の中のもの、セラティム以外に考えられない。

セラティムが、こちらの世界に戻ってきてすぐに、ここの部屋に来たというのはおそらく予想通りだろう。……しかし、セラティムは場所を移動してなどいなかった。この部屋にとどまっていたのだ。

すぐ後ろにいたサツキが、コーリンの言葉を聞いたのだろう、息をのむ気配が伝わってきた。

「……まさかな」

光っている場所とその理由を、コーリンとほぼ同時に理解したのであろう、ケンがぼそりと独り言のように呟いた、その小さな声さえもが、空気をビリビリと震わせるかのような――緊張が急激に膨張する。

その、針で刺せば割れてしまうような激しい緊迫感を堪えながら、

……しかしコーリンは同時に、おかしい、という強い疑問を感じざるを得なかった。

なぜセラティムが、まだここにいるのだ？

神殿の一番奥、封印鏡が安置されていた「扉の間」に、人が倒れていると報告を受けたのが昨日の夜。

扉の間でケンとサツキ、封印鏡の木枠を見つけ、居住区のコーリンの部屋まで運び、彼らが眼を覚ましたのはもう今日の昼近くだった。

おそらく彼らは、セラティムのこちらの世界に来る力に引き摺られたはずなのだから、彼らと同じ時間にセラティムもこの神殿に移動してきたのは間違いないかった。……ここ「封印の間」で自分の体を取り戻し、どこか他の安全な場所、おそらくは自分の居城である闇の島アディーザに移動する時間などいくらでもあったはずだ。

それなのに、なぜまだセラティムはこの部屋にいるのだ？

なぜだろう。……いくら考えてもわからない……。……

コーリンの混乱をよそに、その光は、ますます大きく、力強くなっていく。……薄暗かったはずの部屋全体がこうこうと照らし出され、眩しくて目を細めなければならぬほどだった。

一 復活の章 15

——ちらり、と箱の中で何かが動いたような気がした。

はっとして、サツキはそのあたりを目を凝らして見直したが、何も変わったようなものは——と、思いかけたその瞬間、もう一度、ちらり。

何か、薄い色——薄い橙色？

と思う間に、もう一度、ちらりと一瞬色が見えては消える、その繰り返しだ。

サツキはさらに目を細めてその光を見つめながら、内心の違和感に首を捻った。

何なのだろう？

あの色や光り方の具合が、見るたびにどこか引っ掛かるような、何かを思い出させるような感じがするのだけれど……。

さらにもう一度、それが見えて消えたとき、頭の中に光がさしたように、ハッとサツキは思い当たった。

——眼だ。

間違いない。眼が瞬きをしているのだ、……と、そこまで思い当たった瞬間、ぞわり、と背中じゅうを駆け上る鳥肌。

懸命に、ぞくぞくと細かく震える足を押さえつける。箱の中で起こっていることに神経を集中させようとしたが、……思考が向かうのは、なんで、どうして、という疑問ばかりだ。

あの光は、何なのだ？……眼だとしたら、何の？

コーリンは「セラティムだ」と言っていた。セラティムが発して

いる光、……セラティムの眼なのか？

そもそもなんでセラティムがここに、……もう、どこかに行っているはずじゃなかったのか……！？

サツキが混沌気味に思考を巡らす間にも、何度も瞬きを繰り返して、その“眼”はようやく、ゆっくりと開いた。

焦点が定まったように、ぴたり、と動きを止めたその二つの光は、まさしく一対の眼だった。……橙色に光る、切れるように鋭い、その眼光。

くるり、と動いて、自分たちのほうに向いた、——と思った次の瞬間、その眼が少し動いた。

細くなったその形、……笑っているのだな、と容易に察しがつく動き方だった。

「——遅かったね」

声が聞こえた。

滑らかな声、しかし同時にのしかかるのは、水をうったような静けさ。実際に耳から聞こえているのか、それとも直接頭の中に響いてくるものなのか、サツキには判断できなかった。

声に続いて、眼の下景色を揺らすように見えたものは、……唇が、浮かび上がってきたのか？

見る間に形を為したその口がふと曲がり、……さもおかしそうに歪んだその光景に、また背筋に寒気が走る。

「待ちくたびれたよ」

声とほぼ同時に、その箱の中の光が強さを増した。

サツキが思わず目を細めながら、箱の輪郭が見えなくなった——と思ったその瞬間、ぴん、と割れるにしては静かな音を発して、そ

の箱は碎け散った。

一瞬だけ体にぶつかってきた小さな衝撃のあと、すぐに光が元に戻る。碎けた箱のかけらはかき消えてしまったのか、どこにも見当たらない。

台の前に、ぼうつと人影が浮かび上がった。

その姿を一目見て、サツキは明確な体がない、とはどういうことかを瞬時に悟った。

体全体が――その身にまとっているものでさえも――薄い。

瞬間、サツキは、何かものを投げたら、その体を通り抜けてその先の地面に落ちるのではないか……という、妙な確信にも近い思いを抱いた。

灰色、青みがかった灰色の髪に、真白な肌、薄いだいだいの瞳。

その体を、ぼんやりと髪の色と同じような、灰青色の光が包み込んでいる。

深い紅のマントを纏い、下には黒い服が覗いている。ところどころに施された白灰色の装飾がちらちらと光っていた。服装との対比も相まって、際立ったその白磁のような肌の白さが、……何ともいえず恐ろしかった。

セラティムはこちらをじっと見ながら、無造作に前髪をかきあげた。それからその手を見つめ、ふと唇の端に浮かんだ笑みに、またぞくりと鳥肌が走る。

と、いきなり、コーリンが大股で数歩、前に出た。

靴の音が響いて、セラティムに支配されていたその場の空気がほんのすこし壊れ、サツキは思わずぼうつと息をついた。……知らぬ間に、肩に驚くほど力が入っていた。

「なぜ俺達を待っていた」

コーリンは突き刺すような、張った声音で続けた。

「どうして、さっさとここから逃げなかったんだ」

コーリンの声に、セラティムは頬にちらりと微笑を浮かべた。

「――逃げる、とは少しひっかかるね。逃げる必要もないだろう？」

可笑しそうに、続ける。

「久しぶりに君たちに会いたくて、ずっと待っていたというのに。
ご挨拶だねえ」

そこまで言うと、セラティムはゆっくり眼を閉じた。

と、セラティムの体を覆うマントが一瞬、風もないのに激しくひるがえった。……セラティムが、なにか「力」を放出しているのだ。ぼんやりとセラティムの周囲を包んでいた光が、徐々にその目の前あたりに凝集し始めた。それは固まって光の玉を作っていく。セラティムの髪の色と同じ、灰色の光の玉が、三個――いや違う。四個だ、

もう一つ、セラティムの体の内側から光を発している……！

「鏡は四つに割れた」

サッと、サツキの脳裏に、ひびが入った瞬間の封印鏡の映像が閃いた。

あ のとき、鏡はいくつに割れたか――四、と言われればそんな気もするが、はつきりとは思いつけない……。

「それはすなわち、私の魂が四つに分裂したことを意味する」

そこまで言うと、セラティムは閉じていた眼を開いた。……目の

前に浮かぶ三個の光の玉を見ながら、楽しそうに続ける。

「つまりこういうことなのだろう？……四つのうち、一つはもちろん私が所有する魂。あとの三つを、私は自由に使えるということだよ」

自由に？

どういうふうに、“自由”なのか？

サツキには、その言葉の意味が飲み込めなかったが、隣にいたケンが一瞬息を止めたのがわかった。……あげようとした声を、押し殺しでもしたように。

「君たちは、また私を封印したくてここまで来たんだろうけれど――そのためには、この魂を、四つとも封印しないといけない、ということだね」

「――待て」

と、セラティムの流暢な言葉を遮って、コーリンがうなるような低い声を発した。

「なぜ、そんなことを俺たちに話すんだ？……自分の封印のやり方を敵に話してどうするんだ」

なんでだ、……セラティムの口ぶりからすると、もしかしたら、この話を自分たちに伝えるためだけに、セラティムはここで自分たちが来るのを待っていたのか？

魂を自由に使える、ということの意味は見当がつく。……おそらく、何かに魂を与えるのだ。魂を植えた相手がセラティムの分身となり、さらにセラティム自身に力を与えるということなのだろう。

しかしそれならば、セラティムはなぜさつさと三つの魂を自分の有利になるように使ってしまったのか？そして自分たちを倒してしまわないのか？

これでは、秘密兵器の構造をむぎむぎと敵に話すようなものだ、……しかも、攻略法付きで。

「なぜだ？話すだけ不利になるはずなのに！」

セラティムはあくまでも、ひどく楽しそうだった。

「――聞かないほうがよかったのか？」

微かに笑い声をあげながら、続ける。

「君たちに話すのはこれだけだよ。これで充分」

コーリンがなおも何か言おうとしたそのとき、ケンが後ろからコーリンの肩をぐっと掴んだ。コーリンははっとしてそちらに顔を向ける。

「ケン」

「コーリン、確かに何か妙だけどな。でも要は、あいつを今封印してしまえば済むことだ」

そつと声を落として、

「一瞬でいい。セラティムの力を削いで、鏡の力より小さくすればそれで終わりだ。」

――惑わされるなよ」

その静かな口調に、コーリンはふうっと息をついた。

「――そうだな」

頷いてセラティムに向き直ると、コーリンは腰を落として身構え、剣の柄に手をかけた。……一瞬でさらに膨らんだ緊張が、ぴん、と空気を張る。

ケンは少しコーリンから離れて、サツキの側に来ると、耳元に口を寄せた。

「サツキ、ティリを抜け」

「えっ？」

……早速来てしまったのか、この剣を抜かねばならないときが……。

「いいか、攻撃をしかける必要は全くないからな。後ろに下がってろ。それで何か飛んできたら、とにかく当たらないように斬れ。ティリなら何でも斬れるはずだ」

早口で言ってしまうと、サツキの返事を待たずに、ケンは数歩前に出た。ちらりと傍にいるコーリンに視線を遣る。

コーリンは剣の柄に手をかけたまま、身動きひとつしなかったが、――突然、その手に握っている柄が緑色に光った。

次の瞬間、一気にコーリンが引き抜いた、その長い真っ直ぐな刃は、ぼうっと緑色の光を放っていた。それはまるで刃に緑色の煙が纏わりついているかのようだった。

と、いきなり、ぷつんと糸が切れたかのように、コーリンは駆け出した。一気にセラティムとの間を詰め、斬りかかろうとして剣を振り上げる。

セラティムは一瞬、鋭い眼をその迫ってくる剣に射た。そこに、

ばちっ……!と火花のような光が散ったかと思うと、次の瞬間、コーリンは剣もろとも吹き飛ばされた。

「コーリン!」

思わずサツキは叫んでいた。……ほぼ同時に、コーリンが床に落ちる、どさっという鈍い音が響く。

サツキはもう半ば自棄になって、ティリの柄に手を掛け、一気に刀身を抜こうとした――が。

瞬間、手のひらに返ってきた固い手応えに、……思わず手元に視線を落とす。

ティリが抜けない……?

……どういふことだ……!?

サツキはティリの柄をがちがちと鳴らして引っ張ったが、刀身はびくともしない。

さつき、物置で試しに抜いてみたときには、やすやすと抜けたのに……!

と、ふとサツキは、柄を握るその手から、何かが伝わってきたような気がして、手に神経を集中させた。

これは……ティリを抜こうとするサツキに、なにか頑なに抗うようない……?

――もしかして、これが、さつきケンが言っていたことか? 持つものを選ぶとか、意思があるとか、よくわからないことばかり言っていたけれど……これがそうなのか?

ティリが抜けないのは、ティリ自身の意思によるものなのか?

……冗談じゃない！

こっちは焦ってるってのに、武器なしでどうしろってのよ、こいつ！

くそっ、とサツキがティリをガチャガチャさせながらセラティムのほうを見ると、セラティムの前に浮いていた三つの光——魂が、ゆっくり上にあがっていくところだった。

そのまま、すうっとその光は跡形もなく消えていく。セラティムは笑いを滲ませた表情のまま、コーリンの方にちらりと視線を向けた。

「10年間、私が何もせずにいたと思うか？

——封印されていても、『気』を高め『力』を高めることくらいはできるよ」

一 復活の章一6

セラティムがコーリンのほうに視線を向けたそのとき、コーリンはようやく立ち上がったところだった。

何とかセラティムのほうに意識を集中させようとしているが、かなり衝撃が大きかったのだろう、わずかにふらついているし、隙だらけだ。あの状態では、セラティムの次の攻撃を防げるとはとても思えない。

コーリンを見るセラティムの眼に、また火花が走ったのを見て、サツキはぎくりと心臓を掴まれるような衝撃を感じた。

何とかしなくてはならないのに、

自分には何も出来ないかもしれないけれど、あそこでコーリンを一人にして放っておくことはできないのに、なのに！ 剣が抜けないなんて……！

何か、何かできることはないか――。

と、すぐ斜め前にいたケンの体が、突然、真っ白な光に包まれた。

サツキは驚いてケンのほうを見た。天井に向かって立ち上ったその光は、たったの一瞬でその強さと厚さを増し、サツキの視界からケンの体をかき消した。……その強さに、セラティムはくると首を動かして、コーリンから視線を外し、ケンのほうを見た。

「おっと！」

光の中から、ケンの声が聞こえたかと思うと、光は急に収束した。その光は、ケンが体の前に翳していた杖の石に集まる。その眩い白はどんどん濃く、強くなり、もうほとんどそれ自身が、何かの形

として存在しているかのようにだった。

「やっぱ久しぶりだと、加減がわからんなあ」

ケンがふと呟いた、その独り言めいた口調の柔らかさが、逆に、目の前の光の強さを強調する。

その「久しぶり」という単語に、ふと、さっきコーリンとケンが話していた言葉がサツキの脳裏をよぎった。

もともと、ケンには通常にはない「力」が備わっている、

……こちらの世界は、サツキたちがもっていた世界よりもずっと、

「力」の存在や影響力が大きい……。

こういう、ことなのか。

こちらの世界では、ケンはこの、眩い白の光を自在に操ることができるのだ。

ケンの杖の光は、今やほとんどその杖の石と同じくらいの大きさにまで凝縮されている。

極限まで凝集されたその光が、虹色に見える、と思ったその瞬間、……その光が、しゅる、と鎌首をもたげた。

蛇だ。

虹色に光る眼と鱗がはつきりと見える。ちろり、と虹色の舌が一瞬見えたような気がした。

しゅるり、と体を捌き、顔を回した弾みに、きらりとその蛇の眼が光った。

その視線を一瞬セラティムに当てたかと思うと、蛇は目にも留まらぬ速さで飛び出した。右に左にうねりながら、一瞬の動きのうちに蛇はセラティムの体を束縛しようとその長い体を大きく展開する。

それまで、終始刺すような微笑をその頬に張り付けていたセラティムの顔から、表情が消えた。

ぎっ、とセラティムがその瞳を細めた次の瞬間、蛇が自分の体に到達する直前に、セラティムは高く跳び、間一髪でその蛇をかわした。

目標を失った蛇は、次の瞬間にパッと細かい光となって消える。

ケンはその反応を予想していたのか、即座にもう一匹の蛇を繰り出した。その白い光の筋のように見える蛇を、今度はセラティムは両手を交差させ受け止めた。バシッ！という、力と力がぶつかりあう衝撃音が響き、蛇は跡形もなく消えてしまう。

セラティムは自分の目の前に無数に浮かぶ、キラキラとした白い光――その蛇の残骸、をパッと右手で払うと、そのまま右手をケンのほうに向けた。

と、ばしゅっ！と弾が撃ち出されるような音がして、灰色の光の塊が手から放たれた。ケンは咄嗟に手と杖を前に突き出し、力を放出してその光を受け止めたが、あまりの早さに防ぎきれない。

ぶわっ、とケンが後ろに飛ばされる衝撃で、灰色と白の細かい光が無数の水滴のように周囲に飛び散る。

飛ばされながらも、ケンは空中で一回転し、体勢を立て直した。

慎重に落下地点を見定め、すっとと着地すると、またすぐに杖を構える。

固唾をのみながら、その攻防を見守っていたサツキは、ケンが無事そうなのにはっとしかけたが、……視界の隅に、再びすうっと右手をあげるセラティムの姿をとらえ、はっとそちらに向き直った。

セラティムの右手は、今度はコーリンのほうに真っ直ぐに向けられていた。コーリンは抜き身の剣を何とか構えている。だいぶさっ

きの攻撃から立ち直ってきてはいたが、また攻撃されたら、おそらく無傷ではいられないであろうことは、サツキにも一目で想像がついた。

サツキは無意識のうちに走り出していた。

走りながら、ティリの柄を渾身の力で掴み、引っ張ると、……果たして呆気ないくらい、ティリはするりと鞆から抜けた。

こいつ、この土壇場になって……！

ムカムカしながらも、今はそれどころじゃない、と顔を前に向ける。

すぐにサツキはコーリンの立っている場所までたどり着くと、コーリンの前に立ってティリを構えた。

セラティムの攻撃を斬るつもりだった。……斬れなかったらどうするのか、そんなことは一切頭になかった。

サツキ、やめろ、というコーリンの声が微かに聞こえたような気がしたが、頭から無視して、サツキはセラティムの右手に神経を集中させた。

セラティムの右手が光りはじめる。……と、シュツ、と擦れるような音。力が放たれたのだ。

来るぞ、という自分の感覚が命ずるまま、サツキはブン！と思い切りティリを振った。小気味よいほど、斬れた、という手ごたえがあり、灰色の光は見事に両断されていた。そのまま光はパツと散ってしまふ。

やった……！

——後から考えると、このやった、がまずかったのには違いない。

サツキがほっとしたその瞬間、間髪をいれずに次の攻撃が襲ってきたのだ。――しまった、と思ったその次の瞬間、サツキはもう宙に舞っていた。

ティリを胸の前に構えていたのが救いだった。光は剣にぶつかってその力をだいぶ削がれたが、……それでもひとたまりもない。

力がぶつかってきた衝撃で、ティリが手から離れる。

ごち、と背中が何かに当たったのは、後ろにいたはずのコーリンを巻き込んだのであろう、……二人はそのまま少し飛ばされ、ドサッ、と派手な音をたててひとかたまりに床の上に落ちた。途端に、じいんと痺れるような痛みがサツキを襲う。

全身の痛みをこらえながら、サツキはやっとの思いで顔をあげ、セラティムのほうを見た。――次の攻撃が来たら、終わりだ……！しかし、セラティムは、もうサツキたちのほうを見ていなかった。

セラティムは上を仰ぎ、さっき光の玉が消えていったほうを見ていた。――どこからともなく声がした。

「私以外の、三つの魂を封印しないと、私を封印することは出来ないよ。そのときが来たらまた会おう。

まずは、魂を一個献上するでしょう。頑張って封印するんだね」

その姿が薄れていくような気がするの、自分の目がおかしくなっているわけではないようだった。

急速にその姿は消えていき、後にはセラティムがまっていた灰色の光が、キラキラと残っているだけだった。その光も徐々に力を失っていく。

――最初から、本気で戦うつもりなんてなかったんだ……。ぼうつとしたサツキの脳裏に、そんな言葉が閃いては消える。

「……サツキ」

いつでも自分たちに止めをさせる状況でありながら、どうしてセラティムは、むざむざ放って居なくなってしまったんだ？

それから、『魂を一個献上する』って——どういう意味なんだろう？

「サツキ!!」

突然すぐ近くで怒鳴り声がし、サツキはびくつとして現実引き戻された。

見ればサツキの上半身は、地べたに長くのびたコーリンの上に乗っている。慌ててサツキは立ち上がり、途端に体中の痛み顔をしめて、いたたた……とまた脇に座り込む。

コーリンももっそり起き上がると、相当痛い様子で顔を歪めながらあぐらをかく。……下を向いたその顔のあたりから、ぼそぼそと聞き取りにくい声が聞こえた。

「——おまえ、セラティムの力を斬るとか危なすぎるって、確かにこっちは助かったけどさ……」

「だって……他にどうしたらいいかわかんなかったし」

「まあ……そうなんだけど、そもそも俺がダメなんだけども……」

そのとき、ケンが二人の座しているところまで早足でやってきた。

「大丈夫か？二人とも」

慌てた様子で、二人の横に屈み込み顔を近づける。

「歩けるか？」

「ああ、体中が痛いけど、大丈夫だと思う」

あたしも大丈夫、とサツキもケンのほうを向いて頷いてみせる。
ケンはほっとしたように息をつく、そのまま二人の脇に腰をおろした。……ついさっきまでの、セラティムとの激しい攻防など忘れてしまったかのような、涼しい顔だ。

「コーリン、おまえ剣の腕をあげたな」

コーリンは変わらず、げっそりした表情で、

「ケン、それ、皮肉にしか聞こえないんだけど」

はあっ、と溜息をつきながら、コーリンはまた床の上に仰向けに寝転んだ。周囲はまだ、先ほどの攻防の名残でかなり明るかったが、少しずつその光も薄れているのが感じられた。

「普通なら、完全にやられてる展開だろ？……全く歯が立たなかった。

あいつ、10年前とは桁違いだ——あんなに力を繰り出すのが速かったら、いくらがんばっても剣じゃ太刀打ちできない。

……でも、どうして、奴は止めを刺さずに、消えてしまったんだろう」

わからないことだらけだ……と、また溜息をつく。

うーん、とケンは首を捻った。

「——まあ、話を総合して普通に解釈すると、俺らにその三つの魂を封印しろ、って言いたかったんだろうけどな。

でも、なんで奴がそんなことをわざわざ言いにくるのか、理由は全くわからない」

ぷつりとケンは言葉をきったが、気をとりなおしたように、でも、

と続けた。

「とりあえず、今は封印のことだけ考えるしかないだろうな。理由はわからんが、封印しなきゃいけないものはいけないんだから」

まあね、とコーリンは曖昧に黙った。

確かにそう考えるしかない。……しかし、自分たちが三つの魂を封印することで、おそらくセラティムには何か有利になることがあるのだ。そうでなければ、わざわざセラティムが自分たちに教えるわけがない。

そのことに早く気付かないと、おそらく自分たちは、セラティムの仕掛けた罠にどっぷりと嵌ってしまうだろう。

ただ、気付いたところで、その罠を回避する方法があるかどうかもわからないが……。

部屋の中は、もうだいたい薄暗くなってきていた。

ようやく体の痛みもましになり、とりあえずこれからどうするか、決めないとな……と、コーリンがまだ少しぼんやりする頭で考えていた、そのとき。

ぎぎ、と音がして、扉が開いた。

突然、廊下の明かりが部屋の中に入ってくる。三人はびくつとして、扉のほうを向いた。

その明るさを逆光に受けて立っていたのは、神殿の玄関口で会った神官、カイだった。全力で走ってきたらしく、肩を激しく上下させている。

「――コーリン！」

ハアハアとあがった息の下から、カイは叫んだ。

逆光でその表情はよく見えないが、それでも顔面が蒼白であることは見て取れた。

これは——ただごとではない……！

「た、大変だ——祭壇の、像が」

急いで立ち上がった三人に、カイはひとつ深呼吸して、言葉をつないだ。

「像が、動き出した」

二 アダフェラの章一

二 アダフェラの章

薄暗い廊下を、サツキにコーリン、ケン、そしてカイは走っていた。

走っている方向から考えたら、封印の間から出て、神殿の入り口のほうに戻っているはずなのに、……ますますその奥深くに沈んでいくような、不可解な空気がその場を支配していた。

先頭を走っているコーリンの足取りには迷いがない。……ついさっきの、カイとの短い会話で全てを理解したんだろう、と何となく想像がついた。

『像が動き出した』

カイの声と一緒に、その声に籠っていた響き、……驚きや恐怖、困惑といったその内心までが、何度も鮮明に脳裏に閃く。

何か大変なことが起こってしまった、というのは、その言葉と声からもすぐに伝わってきたが、……でも、『像』って、何のことだろう？

と、サツキのすぐ前を走っていたケンが、隣のカイに尋ねる声が聞こえた。

「像が動き出したって？ ということなんだ？」

ケンも、サツキと同じ疑問を抱えていたらしい。

……それが、と答えたカイの表情とその声は、変わらずに沈鬱だった。

「アダフェラの像が動き出したとの連絡がありました。

アダフェラは、この神殿、パルミゾイルの風の神殿が祀っている風の神です。

神殿に入っただけの、祭壇の間に安置されているのですが……急に動き出したと、それ以上のことは、私にも詳しくはわからずで……」

「風の神……」

と、先頭のコーリンが、ちらりとこちらに顔を巡らせた。

「さっきセラティムが言ってた奴だ、『魂を献上』って」

「えっ？」

「あ、……そうか」

コーリンの硬い声と、その言葉に、一瞬意味が捉えられなかったが、……次の瞬間、思わず息をのむ。

確かにそうだ。……間違いない。セラティムが、像に魂を与えたのだ。

このタイミング。そして消える間際、セラティムが発した言葉――。

『まずは魂を一個、献上するでしょう』

あの言葉の意味は、このことを指していたのだ……！

そして、動き出したのは、風の神の像だという。

カイの説明、その言葉の意味は簡潔だったのに、その実、本当のところは、よくわからなかった。……動き出した、というその言葉と、その映像が、どうしても結びつかなかったのだ。

動き出したのは、アダフェラという名前の像で、そしてその像は、すなわちこの神殿が祀っている風の神……？

つまり、……動き出したのは神？

いや……まさか、と思いながらも、少しずつ混乱を深める、どこか。

サツキは、自分の息があがっているのを感じていたが、それは単に走り続けているからなのか、……それともどこか精神的な、重圧のようなものがそうさせるのか、自分でもよくわからなかった。

もうそろそろ走るのも限界なんだけど……！と、サツキが足を止めてしまいそうになるのをこらえながら、何とか後についていくうち、先頭のコーリンはようやく走るのをやめた。

荒い息をつきながら、その曲がり角を曲がると、そこには祭壇の間に続くと思われる大きな扉と、その扉の前に集まっている数人の神官の姿があった。みな一様に硬い表情だ。

走ってきた四人の姿を見て、その神官のうち年配の一人が、コーリン、と声をあげて数歩前に出た。神官の長なのだろうか、その風采には威厳があり、まどっている法衣の随所に、高貴な装飾が施されているのが見えた。

コーリンもその神官を見て、ハッとした様子で、

「ラムダさま」

「コーリン、カイから封印鏡の話は聞いた。しかしこのアダフェラの像は……。」

一体何が起こったというのだ、……何か、関係があるのか？」

コーリンは一瞬、口を噤んだが、やがて思いきったように口火をきった。

「……封印の間に、セラティムがいました」

神官たちの表情に、一斉に驚きと、恐れとが走る。コーリンは慎重に言葉を継いだ。

「もうとつくに、封印の間からはいなくなっていると思っていたのですが……。」

セラティムが言うには、……封印鏡は四つに割れ、セラティムは自分のもの以外の、三つの魂を自由に使うことができる、と。

セラティムを再び封印するためには、その三つの魂を全て封印しなくてはならない、と、

——そして『最初の魂を一つ献上する』と言って、消えました。おそらく奴が、魂を像に与えたのだと思います。……封印すべき三つの魂の、一つ目を」

ラムダと呼ばれたその神官は、緊張を和らげるかのように、深い息をひとつ吐くと、……ゆっくりと声を発した。

「それで、おまえは、これからその魂を封印しに行くのか」

コーリンはまた一瞬黙ったが、一言だけ、はっきり言葉を継いだ。

「……はい」

ラムダはその返事を予想していたのか、ふうっともう一回、深い息をついた。

「……まさか、こんな日が来るとはな。

おまえが、10年前の、あのときのアイルと同じ顔をして、同じ言葉を言う日が来るとは。

アイルも、……おまえの父親も、あのとき同じように行くと言って、……結果として、命を落とすことになってしまった。

また、ここで、おまえを行かせるわけにはいかないよ。……繰り返し返すわけにはいかないのだ。

この部屋は今から、最大の力でもって封じる。セラティムが、アダフェラの像に魂を植え付けるなど、……動き出したアダフェラがどんな力を持っているのか、まるで見当もつかないからな。

下手したら、この神殿はおろか、この冬の島、パルミゾイルそのものも消し飛んでしまいかねない……！

急いで他の島に連絡を取ってみよう。救援が来るのを待ってからでも遅くはないだろう」

ラムダの言葉に、コーリンはしばらく黙っていたが、やがて意を決したように顔をあげた。

「ラムダさま、少しだけ、待ってもらえませんか」

コーリンは少し言葉を切って——迷ったような感じだった——続けた。

「親父は——父アイルは、このことを予言していました」

ラムダが息をのむ。……周囲にばらばらと立っていた神官たちの表情にも、一斉に動揺が広がったのがよくわかった。

コーリンは静かに続けた。

「最後の戦いの前日でした。

自分の封印は不完全だと言っていました。……セラティムが生きて、封印鏡の中に存在している限り、いつか必ず、自分の封印をセラティムの力が凌ぐときが来る、そしてセラティムは必ずまた戻ってくる、と、

そうしたら、次はおまえがセラティムを完全に封印する番だ、と言われました」

そこでコーリンは、記憶をたどるように、一拍だけ間をおいた。

「ラムダさま、……私に、魂を封印させてくださいませんか。

個人的な、自分勝手な気持ちだって、わかっているんですが……父との約束を守りたいんです。

仲間も一緒に戻ってきてくれました。……戻ってきたことはただの偶然、事故かもしれないけど、一緒に戦って封印しろって、親父が言っているような気がして」

ラムダは少しの間、逡巡するように黙っていたが、……やがてゆっくりと頷いた。

「……わかった。……そこまで、強い気持ちでいるなら、もう止めても無駄だろうからな。

まずはお前にまかせてみよう。

ただし、もし封印が難しそうなら、そのときは他の島にも協力を呼びかける。くれぐれも無茶はするな。封印できないと判断したら、すぐに戻ってくるんだぞ」

はい、とコーリンが頷くのを確かめてから、ラムダは、後ろにいたケンのほうに顔を向けた。

「ケン殿、頼みましたぞ。くれぐれも無理はなさらぬように。

我々は、待っている間、できるだけの結界をこの扉に張ります。

アダフェラの力が神殿の外にまで影響を及ぼさぬよう」

ケンも黙って頷いた。

……と、そのとき、カイが一步前に出た。

「待てよ。俺も一緒に行く。おまえにばかり、まかせるわけには

いけないだろ、……俺にだって援護ぐらいは」

コーリンは、眉を寄せ真剣なカイの顔をじっと見たが、ふとニツと笑みをこぼした。

「じゃ、これ持つって」

封印の間を出るときに急いでひっ掴んで、そのまま手に持っていた緑色のローブを、ポンと手渡す。

「え？おい、コーリン！」

「行ってくる。……気持ちだけ、もらっとくよ」

一步、足を踏み出しながら、コーリンはちらり、と後ろのケンとサツキに視線を送る。

それを合図に、ケンは杖を右手に持ち替えた。……瞬間、音が鳴りそうなほどに、ぴんと張り詰める緊張。

扉の側にいた神官が、その重そうな扉を左右からギギィ……と開ける。

中は明るく、ぼんやりと、うす緑色の光で満ちていた。

二 アダフェラの章一2

自分の後ろで、また、ギギィ……と扉が閉まっていく音がする。

その奥行きのある部屋は、さっきの封印の間とは打って変わって、左右の壁にたくさんの緑色の石が埋め込まれ、あかあかと光を放っていた。床には真っ直ぐに臙脂色の絨毯がひかれ、この一本の道筋が、神殿の中枢であることを物語っている。

正面、一番奥には台座が設えてあり、人の形をかたどった石像が一体安置されていた。その左右、壁に沿った場所にも、石像が一体ずつ配置されている。

——それにしても、なんて細かい、精巧な像だろう……。

近づくにつれ、克明になるその彫刻の鮮やかさを、サツキは息をのむ思いで見上げるしかなかった。

風の神アダフェラは、女性にかたどられていた。

その形は、もう全く生身の人間と変わらない——切れ長の瞳は伏し目がちに下を見下ろし、細かく装飾が施された槍を持つ華奢な手、そして背中に負っている、一对の優美な翼。

しかし、その像が「動いている」ようには見えなかった。

サツキはその部屋を横切って、じりじりと像に近づく間、どんな変化も見逃すまい、と、眼を皿のようにして凝らしていたが、手に持った槍を頭の上、斜めに翳すそのポーズは同じだ。微動だにしない。

前を歩くコーリンとケンも、同じように像に意識を集中させているのが、その背中に滲む緊張からもよく伝わってくる。

像までもうあと数歩、というところまで近寄ったあたりで、……唐突に、どきんと心臓が激しく脈打った。そのまま、どきどきと鼓動が早くなる。

背中の翼が、……呼吸するように、ゆっくりと、少しだけ広がっては閉じる造作を繰り返していたのだ。

その翼は石造りではなかった。……厳密には、石造りではなくなっていた。

咄嗟に、……本物だ、と思った。

あまりにもその純白の、美しい翼が自然で、最初見たときは何も感じなかったのだけれど、自然なはずだ。……『本物』なのだから、翼にびっしりと生えている羽根の一枚一枚まで、その形はすべて、全く自然界に存在するそれと同じで、……その翼は、魂の宿る生身の体そのものだった。

翼から、その体に眼を移して、サツキはやっと気付いた。

……像は、足下から色が変わりつつあった。

石像の、少しだけくすんだ白い色が、人の体が持つ、そして身にもとうものの色へと変化していつているのだ……！

すさまじく鮮やかな、生々しい変化。

何か、刷毛でさっとひと塗りでもしたかのように、色が変化していく。足首、ふくらはぎ、……そしてその体に纏わりつく、絹のような柔らかい触感をもった緑色の衣服。

冷たい石から、人の体へと、確実に変化していつているのが手に取るようにわかる。身にまとうものの、装飾品、それからその手に握られている槍の、その銀色に光る金属さえも、石からそのものへと質感を変えていた。

その変化は、ゆっくりと、体の下から上へ進んでゆく。……三人

は言葉もなく、それをただ見守った。

また背中の翼が、音もなく優美に広がり、閉じる。
その動きはほんとうに自然で、もはや目の前にいるのは、像ではなく、一個の人だった。……あるいは、神の化身だった。

頭の先まで、色が変わってしまおうと。

ふと像——アダフェラは、眼をはっきりと開けた。

深い緑色の瞳が、何かを探すかのように視線を彷徨わせる。

白い肌、眼の色と同じ深い緑の長い髪。頭には羽根をモチーフにした銀色のティアラをつけ、同じ羽根の装飾が施された銀色の槍を手にしている。その槍の穂先は緑に光る石で作られており、きらきらと室内の照明を反射していた。

コーリンの法衣と同じ、うす緑色の布で作られた流れるような衣服が、風もないのにさわさわと揺れる。

「……そうだ」

ふと、アダフェラが言葉を発した、その声を聞いた。

「そうだ。

わたしはずっと、長い間——とても長い間、この場所にいて、この景色を見ていた」

よく通る、艶のある声。

と、アダフェラはいとも軽く、ふわりと宙に浮かぶと、自分のいた台座から降りた。……その動きに合わせるように、少しだけ広がった翼が、優しく揺れながらまた閉じる。

「いったい、どのくらいの間、わたしはここにいたのだろう——」

サツキは動くことも出来ず、その姿を食い入るように見つめていた。

その深緑の髪がさらさらと持ち上がり、風になびく。絶えず、その体の周りからは微かな風が立ち上っているかのような、……圧倒的な存在感。

ふと、アダフェラは、何か思いだしたように、自分が安置されていた台を振り仰ぎ、それからその両脇を守るように立つ、二体の像に視線を向けた。

「——それにしても、人間とは残酷なものだな。

ここまで像を正確に創っておきながら、そのまま安置しておくとは、……像は、何百年も何千年も、魂のない抜け殻のままにいるというわけだ。

人と同じように、見えもし、聞こえもし——感ずることも、出来るというのに」

ぽつり、ぽつりと、独り言のようにそういったアダフェラの口調には、微かに皮肉な響きが混ざっていた。——その言葉を、思わずサツキは聞きとがめた。

「像も”感じられる”の？」

その声に、アダフェラはサツキのほうに、その美しい翠眼を向けた。

「そうだよ、……感じる事ができる。人と同じように。ただ、魂がない、というだけ。

感じることはできても、それに対して考えたり、動いたり――反応することはできない」

「……」

その声を聞きながら、サツキはどうしてか、……かなしそうだ、と思わずにはいられなかった。

でも、……何が『悲しい』のだろう？

――この人は、どうしてこんな、かなしそうな声で話すのだろう……？

と、アダフェラは、手にしていた槍をさっと斜めに捌いた。

瞬間、ブン、と巻き起った一陣の風が、サツキにそのままぶつかって、額の髪を持ち上げる。……風になびく長い髪の向こう、翡翠の眼は、真っ直ぐにコーリンを見据えていた。

「それで、……おまえは、どうやってこの魂を封印するつもりなのだ？」

その視線をまともに受けたコーリンが、唐突なアダフェラの言葉に息を詰める気配。

「……知っているのか？」

コーリンの言葉に、アダフェラはまた、微かに頬に皮肉な笑みを浮かべた。

「この魂はセラティムのものだ。知るも知らぬもあるまい。セラティムの記憶の全ては、わたしが感じたと同じこと。

――もっとも、大抵の者は、自分のなかに他の魂が入ってきてても、

全く気付かぬだろうがな。

わたしは、何百年も、風の神の化身と信じられ祈られてきたおかげで、少々は力が備わっているようだ」

ふと、アダフェラはサツキのほうにちらりと視線を向け、……また、頬を持ち上げ口角を歪めた。

「何も、そんな恐ろしい眼でわたしを見ることはなかろう。わたしは神などではないよ。人間に作られた、ただの像なのだから」

アダフェラが、自分の中にあつた不安を正確に言い当てたことに、サツキの背中を、ぞくつと鳥肌が走った。

……アダフェラの像が、すなわち神だったら、と、ずっと考えていたのだ。

アダフェラは風の神の化身、……その像が神に等しい力を持っているのなら、とても自分たちには太刀打ちできないだろう……！
アダフェラは、サツキの内心を読んだかのようにこちらに視線を向け、言い当てて、

それなのに「自分はただの像だ」という……。

「しかし、……おまえが封印に用いる方法まではわからぬ。

何を使う？……神官魔法における『封印の術』か、それとも、風の神殿に伝わる宝器、『封印鏡』を使うのか」

さつと身を翻し、またコーリンに視点を定めたアダフェラをじつと見据えながら、……コーリンは、するりと腰に提げた剣を抜いた。

「何でそんなことを訊く？……封印の方法が、何かおまえにとって

意味があるとしても？

両方だよ。封印鏡と、封印の術の両方を使う。

……魂は封印させてもらうぞ」

コーリンの言葉に、ふっと微かな声を漏らし、その頬に浮かんだアダフェラの皮肉な笑みは、……皮肉を通り越して、もうほとんど自嘲的だった。

「ふうん、……そうか、なるほどね。

何通りもの封印の方法があるんだよ、この世界には。おまえは知らないのかもしれないけれどね。

封印の術は、封印鏡を使うにせよ、力を力でねじ伏せるものだ。

……わたしの力を打ち砕いて弱めねば、魂を封印することはできない。

……それに私も、ようやく得たこの魂を、やすやすと手放すつもりはない」

アダフェラは、手にしていた槍を持ち直した。

「心配するな。——すぐに終わる」

二 アダフェラの章―3

その声のあまりの静けさに、サツキは寒気を覚えた。

すぐに終わる、という言葉は、……つまり、すぐに自分たちがやられてしまう、ということの意味しているのか!?

――冗談じゃない!

こんなところで死んでたまるか……!

サツキは力をこめて、腰に差したティリの柄をつかんだ。……おい、また抜けなかったら、海に放り込んでやるからな! だからさっさと抜ける!

込めた力に合わせて、するり、と、その脅しが効いたのかどうかはわからないが、今度はティリは簡単に抜けた。

よかった……と、サツキがその滑らかな銀色を見て、思わず息を漏らしたのとほぼ同時に、コーリンも腰の剣をひらりと抜くのが視界の隅に入った。

つい先刻、セラティムに斬りかかったときと同じように、その刃は緑色の光で包まれている。

コーリンは油断なく剣を構えながら、声を発した。

「悪いが、あんたみたいなのは俺の専門だ。――知っているだろう? 神官の力を」

くるりとコーリンを振り返ったアダフェラの眼、……その顔と、返した声音は、先刻から全く何の変化もなく、……無表情、どこか

平坦だった。

「自然ならざるものを、浄化する力？——それは効果がないよ。私は魂も体も持つ、ごく自然なものだからだ」

そりゃあ、理屈はそうかもしれないが、自然なものにはとても見えないよ……！

そんなことを冷静に思いながら、しかし、決して落ち着いてなどいないことは自分でもよくわかっていた。……ティリの柄を持った手に、知らぬ間に力がこもる。

「信じないのなら、やってみればよい——」

言いながらアダフェラは、槍でぴたりとコーリンを指した。

「やれるものなら」

その言葉を言うか言わないうち、アダフェラは眼にも留まらぬ速さでコーリンへの間合いを詰め、ぴん、とコーリンの剣をその槍先で跳ね上げていた。

あくまでも静かなその言葉の調子と、その槍の動きが対照的で、……ガシャン、と剣は少し飛ばされた後、床に落ちた。

そのあまりの早さに、わずかに遅れて、脳裏をざっと擦る衝撃。息が止まる。

コーリンは一瞬、まさか、という表情をしたが、……すぐに思考を立て直し、次の行動への判断を下したらしく、

「すまん。剣を頼む」

言いながら、アダフェラからひとときも眼を離さず、コーリンは剣と一緒に腰に装着していたらしい短剣を抜いた。

コーリンの言動を眼で追っていたサツキの胸が、不穏な音をたてる――あいつ、短剣でアダフェラと渡り合うつもりなのか！？狂気の沙汰だ！

――と、いつの間にか近くに寄ってきていたケンが、サツキの耳元で囁いた。

「コーリンの剣を拾って」

「でも――」

「いいから早く」

言うなり、ケンは両手で杖をつかむと、杖からボツ！と白い光が立ち上った。体中にぶつかってくるような、その波動が伝わったのか、アダフェラがちらりとケンに視線を投げる。

コーリンもケンの方を見――二人の間に、何らかの意志の疎通が、つまりは”目配せ“が交わされたような気がした。

サツキには二人の考えが何だか、全く見当もつかなかったが、……とにかく言われたとおりに剣を拾うしかない。ケンの後ろをまわってコーリンのほうへ、剣が落ちているほうへ音を立てないように近づく。

ケンの杖に集まっている光が、ボン、と弾かれるようにアダフェラのほうに放たれた。

しかし、ざつ、とアダフェラが槍を斜めに払い、その光はやすやすと粉々になって消えてしまう。

すぐにまた、杖の先に膨れ上がった白の光の珠を挟み、お互いに意識を集中するケンとアダフェラに、……アダフェラの注意を引き付けるかのようなケンの動きに、サツキは、コーリンの様子と見比べてようやく合点がいった。

コーリンはアダフェラに細心の注意を払いながら、手にした短剣

に指先をあて、何か低い声で言葉を紡いでいる。

呪文のようなそれは、おそらく、短剣に力を付与しているのだ。つまりケンの攻撃は、コーリンが術をかける間の時間かせぎというわけだ。さっきの一瞬の目配せで、このことを伝えあった二人の呼吸にサツキは内心舌をまいた。

と、アダフェラは、その槍を目の前に掲げた。

瞬間、その空が、ぐにやりと曲がったのが見えたような気がして――えっ？とサツキが目を見開いたのとほぼ同時に。ごうっ、と強い風がその部屋に満ちた。

「うわっ」

体を後ろに反らしながらも、何とか両足を踏ん張ってその風に耐える。コーリンも何とか体勢を崩さずに耐えているようだが、アダフェラの正面で一番まともに風を受けたはずのケンは、あおりをくらって飛ばされ、ドン、と鈍い音をたてて後ろの壁にぶつかった。

「ケン！」

かなり奥行きのある部屋なのに、はるかかなた、自分たちが入ってきた扉の近くまで飛ばされたケンが、ずるっとぶつかった壁から下の床に落ちる。

思わず叫んで、駆け寄ろうとしたサツキは、……しかし、はっと視線をアダフェラに戻した。

アダフェラはちらりとケンのほうに視線を遣ると、すぐにコーリンのほうに体を向け、目にもとまらぬ速さで突きかかったのだ。

一瞬、その瞳がはっきりと見えて、サツキはぞくっと体を震わせた。

――何て静かなのだ。

何という、無表情なのだろう。全てが沈黙しているのに、この槍の速さ。……その刃は、正確無比にコーリンの心臓を狙っている。

コーリンも負けずに素早い身のこなしで槍をかわし、大きく一歩後ずさった。しかし、コーリンの指先は短剣にあてられたままだ。まだ術が完了していない。

まずい……！

サツキは、弾みをつけて二、三步前に出ると、その勢いのまま、……もうほとんど本能的な反射のように、アダフェラに斬りかかっていた。

アダフェラは槍の柄でそれを受け、カッーン、と鋭い音がした。

――受けた、と思ったその瞬間には、アダフェラは槍を返し突きかかってきていた。

うわ、と懸命にティリで槍を払いのける。――と、それをまた返して、狙いすましたようにアダフェラはティリの根元を引っ掛け、跳ね上げた。

あっけなく、ティリはぽーんと上にあがると、綺麗な弧を描いて飛び、少し離れたところに派手な音をたてて落ちる。

――やられた。

目の前に冷たい金属の槍が光る。……ぞくりと背中に冷たい波が走った。

――と、サツキは後ろからぐいと肩をつかまれると、思い切り後ろに払いのけられた。思わずよろめいて、数歩後ずさる。

視界を埋めたものは、コーリンの背中だ。それはちょうど、コーリンとサツキの位置交替だった。

見れば、コーリンの握る短剣からはぼうっと長い緑色の光が伸び

ている。術が完成したらしい、その光はあたかも切れ味のよい刃のような鋭さを感じさせた。おそらく長剣と同じように使えるのだらう。

「俺の剣を使え」

サツキに背中を見せたままコーリンは言う、すぐに電光石火のごとくアダフェラに斬りかかった。

アダフェラも槍の柄で受けては返し、応戦する。カン、カン、とひっきりなしにあがる鋭い音が、その攻防の激しさを物語っていた。サツキも急いでコーリンの剣が落ちた場所まで走り、それを拾ったものの、加勢する隙がない。

——ふと、二人は止まった。息を詰めて、お互いの間合いをはかる。

と、コーリンが言った。

「神聖魔法が効かないはずはない。——いくら体と魂があっても、あんたは石像だ」

アダフェラはふと、例の皮肉な笑いを浮かべた。

「そうかもしれないな。

——いずれにせよ、もうそんなことは、どうでもよい」

アダフェラは、ふとその視線を巡らせた。

視線の先、体勢を立て直して戻ってきているケンの姿が見えた。両手で掲げられた杖に集められている光から、ゆらりと圧迫感が揺らぐのを感じた。

「やられっ放しじゃあ、済みませんよ」

その声を合図に、ケンの杖に集まっていた力がバツ！と無数の針のように散らばって、一斉にアダフェラを襲った。

と、——次の瞬間、アダフェラは宙に翔んだ。

力の針はアダフェラが直前までいた場所を通り越し、やがてキラキラと光りながらその力を失っていく。

その広い空間の、ほとんど天井近くまで跳び上がったその体の速い動きとは対照的に、その翼がふわり、ふわりと優美に羽ばたいている。

「まだだ！」

鋭い声とともに、その宙を狙って、ケンはもう一度光の針を放った。

と、何を思ったか、アダフェラは突然その光に向かって翔んだ。力が、真っ向からアダフェラを襲う。

アダフェラは顔色一つ変えずに、槍を斜めに振って——空を斬った。その空はたちまち激しい風となり、光の針を飲み込み、その力を吹き消すかのようにばらばらにしてしまう。

激しい風のなかで、ケンは杖の光を消されまいと必死で操っているが、これはどう見ても分が悪い。

何とかしないと……！と走り出そうとした、そのとき。

アダフェラはケンとの間をつめて、その槍をぴたり、とケンの胸にあてていた。

——ケンは動けない。

あっ、と思うよりも早く、サツキはあの槍がケンの胸を貫くのだ、と思い——その思考に、現実には、体がついていかない。体が動かない。

もうだめだ——ケンっ！

その、確実に自分の心臓も止まったと思った瞬間、なぜか槍は動かなかった。

正確にケンの心臓を捉えたまま、ぴくりとも動かない槍、……そしてその次の瞬間になって初めて、サツキの体が思考に従った。

サツキは走りだした——しかしそれより早く、コーリンがアダフエラに駆け寄ると、思い切りその槍めがけて剣を叩き込んだ。ケンも、槍から逃れようと後ずさる。

その瞬間、アダフエラはほんの少し、反応が遅れた。

辛うじてコーリンの剣を槍の柄で受けたが、その切っ先がアダフエラの腕をわずかにかすった、ような感覚が剣を通して伝わってきた。

アダフエラは一瞬遅れて、ふわりと後ろに翔んで、コーリンと距離を持った。……しかし、その腕には何も斬れた跡のようなものは見えない。

ちらり、とその顔に動揺が走ったような気がして、サツキは訳もなくそこに立ち止まって、アダフエラを見守った。

——何だか、その動揺が、何かはわからないが、とても——とても、嫌なもののような気がしたのだ。

コーリンもアダフエラとの間合いをはかりながら、表情の変化に気付いていた。……そして、さっきから膨れ上がり続ける疑問。

どうしてアダフエラはケンを攻撃しなかったのか？

こっちは救われたが、さっきから、微妙に手加減されているような気がしてならない。

殺そうと思えば、ケンだけじゃない、サツキだって、自分だって、

殺せたものを……！

その思考は、がしゃん、という高い音に中断された。

アダフェラが、槍を床に落としていた。

……コーリンが、かすったと思ったその左手が、細かく震えていた。

二 アダフェラの章―4

「おまえの神聖魔法が、効いたのやら」

……どうしてあんたは、そんなに冷静なの？
こっちのほうがよくばど慌ててる。

微かに震えるアダフェラの手と、その静かな、……静かすぎる表情。

全身が、これから何かよくないことが起こる……！と、確信にも似た嫌な予感で満たされる、そのざらっとした感覚に、サツキは知らず身震いしていた。

「それとも、もうわたしの体が限界だったのか、
……どちらでもよい。そんなことは
見ているがいい」

この左手を。

アダフェラが無表情に、震えている左手を見やった、その瞬間。

サツキは自分の眼を疑った。

ぴしり、とその左手の、ちょうど手首のあたりに、ひびが入ったのだ。

そのひびはすぐに大きくなり、腕にのび、指先にのびて――そこから、ぼろぼろと、手が崩れていく。

いくらもとは石像とはいえ――自分と全く変わらない、その手が崩れるなんて……！

もう、一瞬で手は跡形もなくなり、肩の部分から先が消えてなく

なっていた。崩れた手は、それも一瞬で細かい、さらさらの白い砂となり、下の床に小さな白い山を作っている。

「わたしの体は、魂に耐えられない。——そういうことだ」

アダフェラは、ざっと擦れるような音をたてて柱にもたれかかる、そのまま床に腰を落とした。

さっきから、その冷静な表情、口調は一筋も乱れないが、……ほとんど崩れるようにして床に座り込んだその体のほうは、もしかしたら限界に近いのかもしれない……と思わせた。

「わたしは、所詮石像。

魂の力に耐えられずに、いずれ、わたしの体の全てが砂になる。
わたしは消える」

「……何だって!？」

アダフェラの言葉に、コーリンは思わず言葉を発していた——なかば叫んでいた。

「セラティムは、あんたに魂を与えて、仲間にするつもりじゃなかったのか!？」

気だるそうに、ちらりとコーリンを見上げ、アダフェラはふっと口許を歪め笑った。

「仲間？馬鹿な。

セラティムはおのれしか信じないモノだ。仲間など必要なものか。
……わたしの力だけが欲しかったのだ」

すぐ側にある、白い砂の山——アダフェラの左手の残骸、を無表

情に見やると、アダフェラは続けた。

「自分のものではない、他から入り込んできた魂は、宿った体の全ての力を吸い取ってしまう。……魂が失くなった後、そこには砂しか残らないほどに。」

そして、わたしは——生身の体ではないただの像は、魂の力に耐えられず、おのずから砂となり消滅する」

無表情のまま、続ける。

「それでも、ずっと像でいるよりは、いい。……よかったと思う。早く、わたしの中の魂を封印しろ。おまえなら、簡単に出来るはずだ」

最後、ちらりとコーリンを見ながらそう言い放つと、アダフェラはふいっと眼を閉じた。

その顔は、まったく無表情で——しかし、いやそれゆえに言うべきだろうか、途方もなく胸をきりきりと締め上げる、……これは、哀しみ、なのだろうか？

三人は、無言で立ちつくしていた。

さつき、アダフェラが「すぐに終わる」と言ったのは、こういうことだったのだ。

自分の体がいずれ砂になってしまうことを知っていて、……もしかしたら、それで自分たちを傷つけないよう、手加減していたのだろうか……？

やがて、重苦しい沈黙を破って、コーリンがぼそりと言った。

「——歩けるか」

眼を閉じたまま、アダフェラはゆっくりとかぶりを振る。

「そう。……おい、サツキ」

「はい？」

くるりと振り返ったコーリンに突然名前を呼ばれ、サツキは驚いて素っ頓狂な声をあげた。

まだ初めて顔を合わせて正味数時間、これまでは呼ばれても「おい」とか「おまえ」程度だったのだ、……なんか急にいろいろ飛び越えたけど、まあいいか……？

「ちょっと、その台の後ろにまわって」

言うなり、コーリンはひょいとアダフェラを抱き上げた。

横抱きに抱えられたアダフェラが、ふわりと宙に浮く感覚に驚いたのだろう、その閉じていた眼をぱっと開く。

「何を――」

「いいから」

言いかけるアダフェラを制すると、コーリンはそのまま、アダフェラがもと安置されていた台の後ろに回った。……その台は広間の最奥に据えられていたため、後ろはすぐ壁だ。

コーリンは、サツキにあごをしゃくってみせて、台の真後ろの壁を示した。

「ほら、そこにちっちゃい扉があるだろ、見にくいけど。そこに取っ手がある。それを開けてくれ」

なるほど、わかりにくいだが、確かにここに小さな扉がある。……壁にすっぴきはめ込まれ、恐らくは意図して隠された扉だ。

……しかし、一体コーリンは何をするつもりなのだ？

アダフェラを抱きかかえたまま、どこに行くつもりなのか。

「ここは……隠し通路？」

いつの間にか、サツキのすぐ後ろに回り込んできていたケンが、じっと扉を観察しているのが視界のすみに入った。

「昔のね。けっこう入り組んでるらしいけど」

腰をかがめ、狭いその入り口をくぐると、当然というべきか、通路とおぼしきその中は真っ暗だ。開け放った扉から差し込む光で、左右に通路が延びているのが辛うじて確認できる。

コーリンは右に折れ、何歩か通路を歩くと、すぐに後ろについて歩いていたサツキを振り返った。

「サツキ、次はここ」

言いながら、左手に現れた扉をあごで指し示す。

サツキは煙にまかれたような気分のまま、……コーリンが示す通り、その扉を開け、

……いきなり一杯に差し込んできた光に、眼がくらんだ。

これは……外？

顔に冷気がぶつかってくる。

そこは紛れもない神殿の外だった。

もうだいぶ陽がおち、夕焼けのオレンジ色の光があたり一面を支

配していた。

そこまで寒くは感じないが、肌を刺す冷気は、さっき外を神殿に向かって歩いていった時よりも、明らかに気温が下がっていることを伝えてくる。

神殿から、ゆっくりとした斜面がずっと続き、そのなだらかな地面はカーブを描いて海に消えていた。

そして、その海のほぼ中央に、沈みゆく太陽が燃えるような深紅の光を放っていた。

あたりは一面の雪、ぽつぽつと木が生えているが、その景色をふさぐようなものは何も存在しない。……生まれて初めて見るその光景に、サツキは思わず息を詰めた。

コーリンはアダフェラを抱き上げたまま、すたすたと歩くと、一本の木の根元にアダフェラを下ろした。さくり、と、雪がその重みに沈む微かな音が聞こえた。

アダフェラは木の幹に背中をもたせかけて、何も言わず、じっとその夕焼けを見ていたが、……やがて一言、ぽつりと言葉を発した。

「あの、赤いものは何だ」

太陽はあと少しで、海に隠れるところだった。……その光は、空と海を美しい赤に染めあげていた。

「太陽だよ」

コーリンの声が聞こえたのか、アダフェラはそのまま、身じろきもせずに太陽を見つめていたが、……やがてふっと口の端で笑った。

「――成程、セラティムは、これが欲しいのだな」

その気持ちも、わからなくはないな――と続けた、アダフェラの声からは、さっきまでの自嘲が少しだけ、消えているような気がした。

アダフェラはとん、と頭を木の幹にもたせかけると、

「あたたかい――」

一言、口から押し出すように言ったその言葉が、ずしん、と自身に沈み込む、……重み。

太陽があたたかいことが、当然と思うようになったのは、いつの頃からだろう。

全身に浴びる夕陽、その皮膚を仄かに暖める熱の存在を、自分はこれまで、これほどに、刻み込まれるほどに感じたことがあっただろうか……？

アダフェラは、あの神殿の奥深くで、これまで気の遠くなるような時間、ひたすら石の像として存在し続けていたのだ。

やっと神殿の外に出て、太陽のあたたかさを知ったというのに、もうその魂を、体を、永遠に失くさなければならぬとは……！

沈んでいく夕陽をじっと見つめていたアダフェラは、やがてコーリンのほうに顔を向けて、……ふと、その表情に、困ったような笑みが浮かぶのが見えた。

これまでにない、照れたような、……あるいは泣き出しそうな笑顔だった。

「ありがとう」

その言葉に、コーリンも少しだけ、苦笑いのような笑みを口の端に寄せた。

「いや——」

「あのっ」

突然、素っ頓狂な声を発したサツキに、一斉に視線が向けられる。サツキはうわっ、と顔一杯に焦りの表情を浮かべ、

「あの、あたし——」

何か言いたかった。

今まさに消えて砂になろうとしているアダフェラに、何か言いたかった。しかし、自分の気持ちをうまく表現するような、気のきいた言葉がみつからない。

「あたし——」

ええい、もう思ったままを言ってしまえ！

「忘れないから！」

慌てて、付け足す。

「あたし、あんたのこと忘れない。忘れないから——」

続きに困って、サツキはぷつりと言葉をきって黙り、俯いた。

言葉足らずが情けない……。

何言っただかわからない、と、サツキが自嘲の溜息とともに顔を上げ、アダフェラを見たのと、……ふ、とアダフェラが笑いを漏

らしたのが、ほぼ同時だった。

その、純粹に零れ落ちたかのような笑みは、清冽な美しさに満ちて、

……その、夕闇に沈もうとしていた空間に、一条の光を差し入れるかのようにだった。

自分の言いたいことは、幸運なことに、アダフェラにきちんと伝わったに違いない。

……お世辞でも冗談でもなく、あたしはこの瞬間を一生忘れないだろう。

——と、アダフェラは首をまわすと、海のほうに顔を戻し、三人に背中を見せた。

後ろに立っていたケンが、無言で二人の肩に手を置き、行こう、と促す。

三人が歩き出すと、後ろから、アダフェラの静かな声が追いかけてきた。

「戻ったら、すぐに魂を封印しろ。

体が崩れていくのを眺めるほど、気持ちの悪いものはない。

……ありがとう」

それきり、声は聞こえなかった。

三人は一度も振り返らずに、扉を開けて、建物の中の、沈黙した闇の中に戻っていき、

さっきより何倍も広く感じる、だだっ広い部屋が、変わらずにそこにあった。

三人が、祭壇の間の大扉から外に出てくると、そこにいた神官たちが、一斉に安堵の表情を浮かべて三人の側に駆け寄ってきた。

コーリンはそこにラムダの姿をとらえると、無言のまま近寄り、封印鏡を取り出した。

……ついさっき、アダフェラの言葉通り、建物に戻ってすぐに封印したその魂が、封印鏡の鏡面の欠片としてそこにおさまっていた。おそらく割れたときそのままの姿なのだろう、鋭利な三角形の形でその封印鏡の枠に収まっている鏡面をちらりと見遣ると、……その静かな眼をまわして、ラムダはコーリンに焦点をあてた。

「――行くのか」

コーリンは顔をあげ、まっすぐにラムダを見た。

「はい」

その迷いのない返事に、ラムダはふっと笑った。

「――お前は、昔から言い出したら聞かなかったからな。止めはない。」

ただし、無事に帰ってくることを約束してくれ。

アイルが、……親父さんが亡くなってから、わしはお前の父親がわりだとずっと思ってきた。

これは親の願いだ。いいな」

コーリンは無言で、頷きとも礼ともつかないくらいに、こつくりと頭を下げた。

ラムダは続けた。

「魂を探すのにも、手探りでは埒があくまい。まず、ヒュミルレイ
ン、『水』の島にいくといい。

あそこには大きな図書館があり、図書館付きの魔導師がいる。魔力を持った図書を管理するためだ。彼は魔導師としての腕も一流だし、知識量もおそらくヒュミルレインで一番だ。きっとおまえたちの力になってくれると思う。

手紙を飛ばしておくから、ラムダから聞いたと訪ねてみてくれ」

はい、とコーリンは頷いた。

すると、カイがコーリンのローブを手に進み出て、はいこれ、とローブを差し出した。――その笑顔は、心なしか少し寂しそうだった。

「お前はいつも、抜け駆けするヤツだったよなあ。
無事に帰ってこいよ！ じゃないと怒るからな」

コーリンも少しだけ笑って、ローブを受け取った。ありがと、と声をかける。

それから、じゃあ行くわ、と手をあげると、コーリンはケンとサツキのほうを振り返り、――行こう。と頷いた。

そのまま、三人は無言で、神殿の出口に向かって歩き始めた。

三 貿易船の章 1

三 貿易船の章

一週間後。サツキは海の上にいた。

冬の島、パルミゾイルから、水の島、ヒュミルレインに渡るための定期船に乗っているのである。

「よう」

甲板に巡らされた手摺にもたれ、ぼーっと海を眺めていたサツキに、不意に声がかけられた。コーリンだ。

「すげえ間抜け面してるぞ」

言いながら、コーリンはサツキの隣で手摺に体重を乗せて、面白そうな笑いを投げて寄越す。……サツキはちらりとコーリンの表情を見返し、フンと鼻で笑った。

「何とでも言つて。……ここまで暇だと、全てがどうでもよくなるわ」

航海も今日で七日目。

サツキたちが乗っている、その木製の帆船は、船にしては小さいほうだ。四、五十人も乗れば満員といったところだろう。

乗客は少なく、のびのびと動けるのは救いだったが、とにかく、個人用の寝台と、食堂兼談話室と、甲板くらいしか居場所がない。……当然、やることも何もない。海を眺めるか、コーリンやケンと話をするくらいだ。

そして、やっと迎えた航海の最終日である今日、朝から海に向かって陸地がぼんやり見えるのが、これほど嬉しいことだとは……！

「しかし暖かいよな、だいぶ。なんか調子狂うな」

「水の島は初めてなの？ コーリン」

「初めてだよ。それも、パルミゾイルを出るの自体初めて。右も左もわからないし」

「へえー……。そんなふうには見えないけど」

コーリンの言う通り、水の島に近づくに従い、気候は格段に暖かくなってきた。

てつきり旅慣れしているとばかり思い込んでいたコーリンは、数日前から暑いといって詰め襟の法衣を着ていないが、その「暑い」という感覚も、実は生まれて初めての経験らしかった。

今コーリンが身につけている服も、法衣に準ずるもののようだが、少しだけ襟と袖が開いており、布も薄く、軽そうだ。藍色のような青に染められたその服の襟元に、神殿でローブを留めていたピンだけが飾られている。おそらく神官のしるしとして留められているのだろう。

サツキが出発前に準備してもらった着替えも、同じ植物の繊維らしき布で作られていたが、ざらざらとした見た目よりもずっと肌触りが良かった。少し丈の長い上着と細身の七分丈のズボンというその服はとても動きやすく、襟元や袖口など、ところどころに小さな刺繍がしてあるのが、造りの細かさを思わせる。

「陸が見えるな。あれがヒュミルレインか」

「そう。やつとだよ」

はあー、と大きな溜息をつきながら、サツキは出航当初から抱いていた疑問をコーリンに投げかけてみた。

「ねえ、水の島まで一週間って、長すぎじゃない？魔法で瞬間移動したり、空を飛ぶとかできないわけ？」

コーリンはサツキの質問に、え？と眼を見開いたが、……はあ、
ところからも溜息をついた。

「……出来るわけないだろ」

「ええ？魔法でひとつとびとかさ」

「おまえなあ、……魔法だったって、そんな簡単なもんじゃないんだぞ」

心外そうに眉を寄せたコーリンだったが、納得のいかない様子のサツキに思い直したのか、

「まあ、知らないんだもんな、……説明するよ」

と、また溜息混じりにサツキのほうに向きなおり、背中と左の腕を手摺に預けた。

「ごく簡単に言うと、いわゆる『魔法』っていうのは、この世界に漂う『気』を集めて増幅させる能力のことだ。

この世界の力は、大雑把にいえば、地、水、火、風の四つに分かれていて、それぞれの力は、細かい『気』となって世界中を漂っている。体で感じる風や、水なんかは、その気が自然に集まって形を成したもののだけど、魔法を使えば、自在にそういうものを操ることができる。

ただし、魔法は難しい。かなり厳密な理論があるみたいだし、誰にでもできるものじゃない。専門の魔導師院で何年も修練を積んで、やっと一人前になれるって話だ。しかも血筋も重要、つまり魔法に長けた家系ってのもあるらしい。俺は詳しくは知らんけど。

それで、これから行こうとしている水の島、ヒュミルレインは、まさにその魔導師院がある場所だ。世界中から魔導師やその卵が集

まってくるらしい」

へえー……と、サツキはコーリンの話に聞き入る。

魔法が難しいものだなんて、思ったこともなかった。眼からウロコだ。

この世界について、少しは自分なりに理解してきたつもりだけれど、やっぱり詳しいことはまだ全然わからない。

「空を飛ぶ魔法も、ほんの一握りの魔導師だけができて話だ。

瞬間移動は、力のある魔導師や精霊なら、力を凝縮した空間を作って、自在に違う場所に移動出来るって話を聞いたことがある。こないだセラティムが最後に消えたのは、たぶんそれだろう。

そして、船みたいな大きなものを宙に浮かせるには、かなり強い風の気を長時間保つために、風の力を持った魔石が必要だ。

魔石は、気が自然界で凝縮して結晶化したものだけど、とても貴重なもので、滅多に見つからない。空を飛ぶ船を作ろうと思ったら、とても大きな風の石を船に嵌めこまなきゃならないけど、まず、今の時代にはそんな大きな風の石はない。

風に限らず、力を持った石は採り尽くされているからな。歴史書によれば、大昔には空を飛ぶ船もあったらしいけど」

「へえ、……そうなんだ」

「アダフェラの槍の刃の部分、緑色の石だっただろ？あれは神殿に伝わっていた風の石だ。

あの石が、今では世界で一番大きいものだろう。……でも、あれでも、船を空に浮かべるのは無理だろうな」

「ふうん。そうなのか」

アダフェラ、という単語がコーリンの口から出たのを聞いて、サ

ツキは思わず、相槌をうちながらこっそりとコーリンの表情を窺った。

……この一週間、何となく避けていた話題だったからだ。

あのととき、アダフェラを封印したあとの、場の空気の重さは尋常ではなかった。

その理由は、何となくサツキにもわかる。……それはきっと、セラティムが「魂を与える」と言ったことの意味を、全員が正しく理解したからに違いなかった。

残る、封印鏡の欠片、――魂の断片は、セラティムのものを含めて三つ、

セラティムが、何かに「与える」のであろう魂は、二つ。

あと二つの魂が、どこかで、何かに入り込み、……そのものの生命力を全て吸収しながら、その存在と力とを増し続けているのだ。その生命ごと、これから、封印しなければならないのだ。

セラティムの残した謎、……何で封印のことをわざわざ自分たちに話したのか、

言われたとおりに魂の断片を封印したとして、しかしそれは正しいやり方なのか、

そもそも、自分たちはセラティムに太刀打ちできるのか。

そして自分とケンハは、もとの世界に戻るのか……。

考えても何もわからない、不安だけがどんどん倍増していくしかないような、

この一週間、そんな時間を持て余して、じりじりと少しずつ進む船に耐えていたのは、……ひとつ飛びに目的地に着けばいいのに、と思っていたのは、サツキだけではないはずだった。

少し言葉を切って、何事か考えているようだったコーリンの表情は、特に普段と変わりはなく、またサツキはこっそりと胸を撫で下ろす。

「……おまえ、セラティムとアダフェラみたいな化け物を続けて見たから、勘違いしてるんじゃないの？」

「え？……あ、そうか」

そうかもしれない。……確かに彼らの力はすごいと思ったけれど、あまりにも普通に彼らが力を繰り出し、コーリンとケンも当たり前のように応戦する姿を見て、自分はその光景を基本にこの世界について考えているような気がする。

「うーん、そう言われればそうかも」

「あいつらはほんとに化け物だぞ。あんなの、人間業じゃない。」

こっちの世界は魔力が発達しているとはいっても、普通の人間にできることは、せいぜい風を集めたり水の流れを作ったりして船を動かすくらいだよ」

コーリンの言葉を聞いて、サツキは、そうか、この船も魔力が原動力なのか。と思い当たる。

確かにそうだった。エンジン音がするわけでもなく、誰かが漕いでいるわけでもないのに、ゆっくりとだが、船はずっと一定の方角に進んでいる。

こちらの世界の海には波がなかった。波がないので、海が荒れるということが全くない。風が強いときはあって、少し船が揺れたり

もしたが、それでもほとんど気にならないくらいである。

最初、定期船を見たとき、その造りのあまりの原始的な感じにサツキは恐怖を覚えたが、この海なら、とりあえず浮きさえすれば何だって船になりそうだった。

それにしても、進むことは進むが、本当にゆっくりなのだ。……これが、いわゆる「普通の人間」の魔力の限界ということか？

最初、ヒュミルレインに行くために船に乗る、と聞かされたとき、何の根拠もなく、せいぜい一日くらい乗れば着くんだろう、ぐらいに考えていたサツキは、一週間かかると聞いて愕然とした。

いったいどれだけ離れてるんだ！？と思ったが、実はそうではなくて、船の速度がゆっくりなのだというのに気付くのにそう時間はかからなかった。

「……じゃあ、ケンは何？ Kenは魔法を使えるってこと？」

サツキが口にした素朴な疑問に、ああ、いや、とコーリンが手を振ってみせる。

「ケンが使ってるのは魔法じゃない。」

あれは『霊術』といって、自分の体の気そのもの、念みたいなのを力に変えて攻撃しているんだ。あれができるのは、こっちの世界では精霊だけだ。

ケンはもととも、おまえたちの世界でも、力を持ってたと言ってた。その力が、こっちの世界では何十倍にも倍増しているんだろうけど、……それにしても、あそこまで自分の気を自在に操れる霊術者はなかなかいない。セラティムと違って、ほぼ互角だっただろ？」

「うん、……確かに」

サツキは、セラティムと戦っていたときのケンの表情を思い出していた。

興奮と、恐らくは楽しんでいる気配、……あの「楽しい」という感覚が、ますますその力を強めているような、そんな感じだった。

「じゃあ、コーリンが使ってるのは？魔法じゃないの」

サツキは質問を続ける。

コーリンは考えをまとめているのか、少し黙ってから答えた。

「俺は神官だから、神聖魔法を訓練してる。神聖魔法は、基本的に『聖なる力』といって、そうだな、光みたいなものなんだけど、それを何かに付与する術だ。

俺の場合は、剣に力を付与してその威力を増しているけど、まあ、ふつう神官は剣をとって戦ったりしないから、例えば水に力を付与して聖水にしたり、部屋に付与して悪しきものが入ってこれないようにしたり、そういうことだな。

生身の体に使って、ダメージから保護したり、傷を癒したりもできる。かなり熟練が必要だけどな。

ずっと位が上になれば、聖なる力そのものを相手にぶつける攻撃もできるようになるらしいけど、俺にはそんなことはできない」

「へえー……いろいろあるんだね。

でも、じゃあなんでコーリンは剣を使ってるの？神官なのに」

ちらりと視界に入れたコーリンの横顔、……遠く水の島を見るその眼の鋭さに、不意に、息が詰まるような感覚。……してはいけない質問だったか、と瞬時に後悔する。

「強くなりたいからだろ、……もちろん」

コーリンの声色は変わらず穏やかで、ほっと息をつきながらも、その横顔から視線を外せない。

その眼に走る何かの色に、はっと胸を押さえられるような心持がするのは、初めてではなかった。

凍てつく氷のような、……逆に滾った熱のような、ふとした瞬間にコーリンを支配する、その衝動のようなもの。

『父との約束を守りたいんです』

あるとき、神殿で、ラムダの顔を真っ直ぐに見据え、発された言葉。

コーリンの父アイルは、10年前、セラティムを封印したときに命を落としたという。

この10年ずっと、コーリンはその記憶と、……またセラティムは復活する、という父の予言とだけ向き合って、生きてきたのだろうか。

アイルが命と引き換えたセラティムの封印は、解けてしまった。……自分の手の中で、鏡が割れる瞬間を、見た。

考えれば考えるだけ、……さらに、記憶が逆戻りする。

あるとき——あるとき、封印鏡を割りさえしなければ、鏡を手にとったりしなければ、ケンの家の倉庫を見に行ったりしなければ……。

考えても仕方がないことなのに、……ぐるぐると行きついてしまう、

その場所の熱と痛みは、膿んだ傷のように、意識の奥で存在を主張し続けて止まなかった。

「おーい」

二人の後ろから、不意に声が掛かり、サツキはハッと我に返った。
……ケンだ。

「ケン」

「そろそろ着くらしいな」

サツキをコーリンと挟む形で手摺に凭れ、陸地を眺めたケンだったが、すぐに真顔になってサツキのほうを振り向いた。

「サツキ、ティリはどうだ？」

サツキは瞬間、うつという表情をした。嫌なことを思い出してしまったとでも言わんばかりだ。

「……だめ。」

もう全然ダメ、びくともしない」

サツキの憂鬱の種は尽きない。

……ティリが、アダフェラと戦った時以来、全くもって鞘から抜けなくなってしまったのだ。

原因は全くの謎だが、何となくだけど、……怒っているような感じがする。

その理由は一つ。自分がティリの使い手として不甲斐なさすぎるから。使えなさすぎるからだ。

アダフェラに向かっていったときも、一瞬にしてティリを跳ね飛ばされて終わってしまった。そのすぐ後から抜けなくなったのだから、理由はそれしかないような気もする……。

「あのとき、跳ね飛ばされちゃったのがまずかったのかな、……そんなこと言っちゃって、剣の腕ってもんが」

ああもー！と手摺にガンと額を押し付けたサツキに、ケンがなだめる口調でとりなす。

「まあまあ、気長に待てよ。そのうちまた元に戻るだろ」

うーん……と、手摺に額を乗せたまま唸ったサツキの横で、あつ、とコーリンが正面の陸地のほうを振り向いた。

「そろそろ着くみたいだぞ、……ほら」

ゴーン……と、船の到着を知らせる鐘の音が聞こえてくる。

遠く、ヒュミルレインから風に乗って聞こえてくるその音色が、船を港に迎え入れようとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4309c/>

「封印鏡」

2011年11月18日07時33分発行